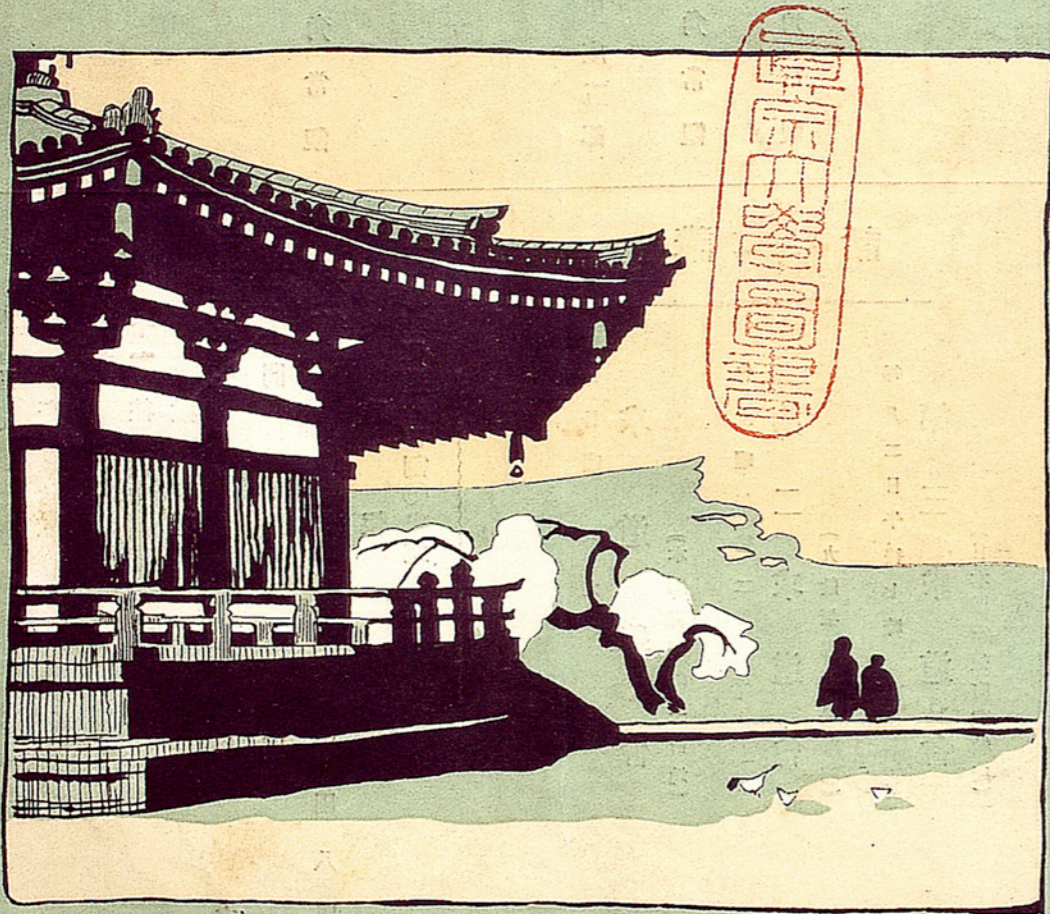


# 求道

第五卷第四號



求道第五卷第四號目次

◎如來 求道

◎大聖の降誕◎夢殿 感謝

◎法王は唯一法なり 講話

◎チータカ釋尊傳 聖傳

◎我は罪惡の凝塊也 告白

◎歎異鈔一第七章 雜錄

◎信仰生活の味ひ 雜錄

◎眞宗慶歎 十一 往還廻向 歎 咏

◎涅槃(長詩) 甲 之

◎静けさ(同) 同

◎深夜筆を呵して(短歌) 増田八風

◎本年春期傳道の日割◎求道講話 時報

求道學舍 (本郷森川町一丁目)

第二求道會 (九段坂佛教俱樂部)

第三求道會 (日本橋區榮町説教所)

講話

「信」の發現  
成功の熱中  
社會的交際  
信じて行ふ  
信仰の眞意義  
信仰に入る第一階梯

人生は遊戯でない  
慶 歎

十一 往還廻向  
歎 咏

◎涅槃(長詩)  
◎静けさ(同)

◎深夜筆を呵して(短歌)

◎本年春期傳道の日割◎求道講話

求道學舍  
(本郷森川町一丁目)

第二求道會  
(九段坂佛教俱樂部)

第三求道會  
(日本橋區榮町説教所)

每月二日午後七時

求道 第五卷 第四號

如來

如來妙色身 世間無與等 無比不思議 是故我敬禮  
如來色無盡 智慧亦復然 一切法常住 是故我歸依  
勝 益 經

吾人は敬みて如來に歸命し奉る、如來は盡十方無碍光なり、  
如來は無量壽佛なり、如來は世界の光なり、如來は吾人の命  
也、如來の光明は無碍にして人生無明の苦惱を救済し給ひ如  
來の生命は無量にして世界常住の大覺に到らしむ、人生若し  
如來在しませば十方の群生何れの處にか生死の海を解脱せ  
ん、世界若し如來在しませば苦惱の有情何の時か攝取の光  
に接せん、如來は一如の靈都より來生して十方の世界に顯は  
れ、如來は眞如の妙境より來生して、三生の衆生を攝化す、  
經に曰く、如來無蓋の大悲を以て三界を矜哀したまふ、世に  
出興したまふ所以は、道教を光闡して群萌を救ひ、惠むに眞  
實の利を以てせんと欲してなりと、是大聖釋尊の應現したま  
ひし所以にして亦三世十方の如來の出生したまふ所以也、若  
しそれ如來常住の覺月隨緣感應するに至りては生死の藺煩惱

の林滴々の露何れの處にか其影を宿さざる所がある、經に曰  
く、如來の妙色身、世間與に等しきものなし、無比不思議な  
り、是故に我敬禮したてまつる、如來色無盡、智慧亦復然り、  
一切法常住なり、是故に我歸依したてまつると。  
世の學者よ、哲學者よ、如來を以て冷かなる世界本體の看を  
爲す勿れ、如來は吾人有限の智識を以て測量すべきに非ず、世  
の學者、吾人智識の尺度を以て如來を測らんとす、狂妄も亦甚  
しきかな、吾人の智識を標準として以て如來を信ぜんとす、是  
吾人の智識を如來已上に置く者、何の信かこれあらん、信とは  
やがて是れ、如來の絶對無限に對して吾人智識の有限相對な  
るを自覺して、初めて不可思議を絶叫したるの態度なり、如  
來は唯自覺によりてのみ認め得べし、即ち如來は光明により  
てのみ吾人をして其光暉に至らしむ、世の學者、哲學者、倫理  
學者よ、汝か理論、本體、原理を以て如來に擬する勿れ、是れ如  
來を冒瀆する者なり、汝等心を卑ふして自覺實驗の光に接せ  
よ、百千の假定戲論は恰も霜柱の朝曦に解くるが如きものあ  
らん、聖人曰く、聖道門のひとはみな、自力の心をむねとして、  
他力不思議にいりぬれば、義なきを義とすと信知せりと。  
世の實務者よ、經營者よ、汝等如來を認めずして妄に活動

すること勿れ、人生自覺より来る活動に非んは悉くこれ盲動なり、今世の所謂個人の奮闘によりて成功せんとする、百千の經營は悉くこれ我利我執の結晶にして、闘争堅固の有様也、世の政治家よ、實業家よ、信仰を以て世外に隱遁するものとして恐ること勿れ、信仰を以て消極退嬰の性質を帯べるものとして遠かる勿れ、信仰を以て利益勝利に反するものとして嫌忌することなかれ、吾人の如來を信ずるは、信ずべきを信ずるなり、吾人有限の力をして、如來絶對の力を感得するなり、人間迷妄の經營を排して如來指導の命令の下に活動するものなり、吾人一たび如來の慈光に照耀せられれば、苦惱頓に消滅して、心中歡喜感謝の情油然而して起り、自覺自信の力堅牢にして援くべからず、其進むべきに當りてや山嶽をも碎くべく、其止まるべきに當りてや磐石の地盤と連るが如し、而も一たび我利我執の念去るに至りてや無碍自在の所として通ぜざる所なし、求めざるに自ら興へてられ、招かざるに自から來り、知らず識らずの間、冥衆に護持せられ、諸佛に護念せらる、眞諦の信仰を以て世諦を經營するものは將來の理想の政治家也、理想の實業家也、如來を認めざる政治は惡魔の支配也、如來を信ぜざる實業は修羅の戦也。

逸に耽るが爲にあらす、健康強猛を誇るべきに非ず、澹恬自然を樂むが爲にもあらす、寧ろ此等の路を塞ぎて吾人を驅りて本願一貫の大道に追ひ入れたまふ、如來の光明は盡十方無碍光なり、鐵窓の下、病床の頭何れの所か其光の到らざる處のあるべき、如來は十方の衆生をみそなはして一子の如く憐念したまふ、吾人日夜大悲無倦の光益を蒙る、哀々たる父母我がために劬勞したまふ、嗚呼吾人久しく惑へる哉、吾人幸に始めて如來の名號を聞く、豈信心歡喜乃至一念せざるべけんや、是吾人が自ら生ずる信心に非ず、眞に是れ如來至心に廻向したまふ也、聖人曰く、夫れ以みれば信樂を獲得すること如來選擇の願心より發起し、眞心を開闡することは大聖矜哀の善巧より發起せりと。

世の賢善精進を現する人よ、僞善假善を衒ふの人よ、須らく内懷虛假の本心を顧みて、猛省一番其罪惡を自覺せよ、嗚呼罪惡を自覺せざるの人は最も貪しき人也、何んとならば無上の寶を得ること能はざれば也、嗚呼十方の衆生誰か、如來の下ありて頭を擡げ得るものぞ、聖人曰く、彌陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとへに親鸞一人がためなりけり、さればそくはくの業をもちける身に於てありけるを、たすけんとおぼ

嗚呼如來は人生の光也、生命の源泉也、世の苦めるもの、迷へるもの、人生の行路に惱めるものよ、直に來りて如來招喚の聲にきけ、西岸上に人ありて喚て言はく、汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らん、すべて水火の難に墮せんことを畏れざれと、嗚呼貪欲の愛波よく善心を汚し、瞋憎の猛火常に功德の寶財を燒く、唯仰ぐべきは如來救濟の喚聲なりけり、佛誓ひたまはく我佛道を成るに至りて、名聲十方に聞へん、究意して聞ゆる所なくば、誓ふ正覺を成せしと、現時吾人が佛名を耳にし亦口にすることは此誓願あるが爲也、聖人曰く、稱名は能く衆生一切の無明を破し、衆生一切の志願を満てたまふと、嗚呼如來の名號は本願招喚の勅命也、本願は如來清淨眞實の親心也、德號は如來の慈父、光明は如來の慈母、光明名號の因縁は吾人貪瞋煩惱の中に清淨の信心を起さしめたまへり、和讃に曰く、釋迦彌陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し、われらが無上の信心を、發起せしめたまひけりと。世の囹圄に苦める人よ、世の病苦に呻吟する人よ、世の煩悶懊惱に泣ける人よ、是れ直に如來善巧の手に觸れつゝあるにあらずや、見よ如來の慈光が汝が頭に輝けるにあらずや、如來哀愍の情は汝が胸中を照すにあらずや、人生は肉體の安

したちける本願のかたじけなさよ、嗚呼吾人流轉の凡愚、如來慈光の攝取に遇はずんは如何にして罪惡を消滅し、生死を解脱せん、一たび如來の光明に接しなば亦如何なる罪惡が救濟せられざるべき實に是れ本願圓頓一乘の極致也、勝鬘經に曰く、

得一乘者、得阿耨多羅三藐三菩提、阿耨多羅三藐三菩提者、即是涅槃界、涅槃界者、即是如來法身、得究竟法身者、則究竟一乘、無異如來、無異法身、如來即是法身、得究竟法身者、則究竟一乘、究竟一乘、即是無邊不斷、世尊如來無有限齊時住、如來應等正覺後除等住、如來無限齊、大悲亦無限齊、安慰世間、無限大悲、無限安慰世間、作是說者、是名善說如來、若復說言無盡法、常住法、一切世間之所歸依者、亦名善說如來、是故於未度世間、無依世間、與後際等、作無盡歸依、乃至若有衆生、如來調伏、歸依如來、得法律澤、生信樂心、歸依法僧、是二歸依、非此二歸依、是歸依如來、歸依第一義者、是歸依如來、此二歸依第一義、是究竟歸依如來、嗚呼これ眞の如來也、盡十方無碍光如來也、吾人前號に於て聖德太子の靈告の日域大乘相應地の文字を以て行卷一乘海の釋

の淵源たるべきを感得したりしが、今や一步進みて彼一乗海の聖人の御自釋が全く此勝鬘經の全文を用いたまふを發見するを得たり、吾人は靈感湧き來りて遠く太子及び聖人の昭鑒の下に二聖の眞意を世に光闡するの光榮を有す、且つ經文明らかに如來に歸依するを以て究竟一乘となし、第一義乘となす是れ即ち行卷に一乘は即ち是れ第一義乘なり唯是誓願一佛乘なりといふ所以、明らかに知りぬ親鸞聖人の眞宗は和國教主聖德皇の大乗の至極、三寶歸依の究たることを、十七憲法、二に曰く、篤く三寶を敬せよ、三寶とは佛法僧なり、則ち四生の終歸、萬國の極宗なり、何れの世何れの人か、是法を貴ぶにらん、人尤も惡しきもの鮮し、能く教ゆれば之に従ふ、其非れ三寶に歸せずんば何を以て枉れるを正さんと、嗚呼十方衆生の昭喚、罪惡救濟の本願に非ずや、眞個にこれ如來大慈の光明也、如來大悲の攝取也、豈吾人哀愍攝受を請はざるべけんや。

哀〔覆〕護我一 命ニ法種増長一 此世及後世 願ハ佛常攝受シタマヘ  
我久安立汝前世已ニ開覺セリ今復攝ニ受汝ヲ未來ニ生モ亦然  
我已ニ作ニ功德一 現在及餘世 如レ是衆ノ善本ナリ唯願見ニ攝受一  
勝鬘經

感謝

大聖の降誕

四月は大聖の降誕したまひし聖月也、八日には大恩教主釋迦世尊嵐毘尼園の樹下に降誕ましましけり、天上天下、唯我獨尊、三界皆苦、我當安之の、大音宣布は人生如來の光明の輝ける曙光也、七日には念佛の元祖法然上人長承二年を以て降誕ましましけり、麗はしき旗二旒天に翻りて下る、選擇本願念佛南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本の大德音の六十餘州に震へる源なり、而して一日には親鸞聖人承安三年を以て降誕したまひけり、五松の靈夢によりて名つけて十八公鷹と稱す、是れやがて往還廻向教行信證の人生に光闡せられたる根原也、而して和國の教主聖德皇奉めて憲法十七條を製したまひしも亦四月也、今や櫻花爛熳として雲の如く坐ろに嵐毘尼園の春を偲はしめ、春風聞々として古聖の出現を慕はしむ、鳥の聲啾々たる、流水の洋洋たる悉く法音たらざるはなし、讚に曰く、

無明の大夜をあはれみて

法身の光輪さほもなく

無碍光佛としめしてそ

安養界に影現する。

久遠實成阿彌陀佛

五濁の凡愚をあはれみて

釋迦牟尼佛としめしてそ

迦耶城には應現する。

救世觀音大菩薩

聖德皇と示現して

多々のことくすてすして

阿摩のことくにそひたまふ。

聖德皇のおあはれみに

護持養育たへすして

如來二種の廻向に

すゝめいれしめおはします。

本師源空世にいて、

弘願の一乘ひろめつゝ、

日本一州ごとくく

淨土の機縁あらはれぬ。

智慧光のちからより

本師源空あらはれて

淨土眞宗をひらきつゝ、

選擇本願のへたまふ。

敬禮大慈阿彌陀佛

爲妙教流通來生者

五濁惡時惡世界中

決定即得無上覺也。

夢殿

太子傳曆に曰く、此月望日太子斑鳩の宮に在す、夢殿の内に入りたまふ、此殿寢殿の側に在り、御床褥を設けて一月に三度沐浴して入りたまふ、明日一海表の雜事を談りたまひ、及び諸經の疏を製したまふ、若し義に滯ることあれば、即ち夢殿に入りたまふ、常に東方より金人来て告ぐるに妙義を以てす、戸を閉て開かざることを七日七夜、御膳を進めず、侍従を召さず、妃已下之に近くことを得ず、時人大に之を異とす、慧慈法師曰く、殿下三昧定に入りたまふ、敢て驚かしたてまつ

ることなかれ、八箇日の晨玉の机の上に一巻の經あり、廷を設けて慧慈法師を引かじめて告て曰く、是れ吾が先身に衡山に修行せしとき持せる所の經なり、去年妹子が將來せしは吾弟子の經也、三の老比丘吾藏むる所の處を識らずして、他の經を取て送れり、故に吾頃魂を遣して取り來れり、落る所の字を指して法師に示したまふ、師大に驚きて之を奇とす、妹子が將來せし經には此字あることなし、太子出定の後常に口遊ありて曰く怜むべし、怜むべし、大隋國の僧には我善智識なり、好て書を讀む、若し書を讀まされば弟子とするに足らずと是れ勸戒の訓也と、神秘不可思議の至極也、夫れ聖德太子南嶽惠思禪師の再誕なりと是れ鑑眞和上の傳ふる所、嗚呼聖德皇太子は日本の教主、千古の大聖也、而して本月表裝畫く所實に夢殿の眞景也。武田京都高等工藝學校教授の厚意を以て作られたるもの、而して同氏が昨年本誌表紙に畫かれたる觀音の靈像は夢殿の本尊也、想見る皇太子此殿内に入定したまひて心を前世に遊ばしめ、思を海外に馳せ、一念一時諸佛の淨土に遊び、同處同時に十方の群生を教化したまふことを、而して現在現時吾人を救濟したまふこと千古萬古渝ることなし、是即如來常住無有變易なる者也、讀に曰く、

講 話

法王は唯一法也

〔求道學會日曜講話〕

近 角 常 觀

今日の題は「法王は唯一法也」と出して置きました。法王とは廣大なる大悲の如來を、法王と言はれたのであります。聖人の和讀の中にも

如來は無上法皇なり  
菩薩は法臣としたまひて 尊重すべきは世尊なり

ともあります。即ち大悲の阿彌陀佛をば、十方諸佛中の本師法王と申したのである。此語はもと華嚴經の中にあるのです。親鸞聖人は此文を「行卷」に引きなされて、華嚴經に言はく、文殊の法は常に爾なり、法王は唯一法なり、一切の無碍人一道より生死を出てたまへり、一切諸佛の身は唯是れ一法身なり、一心一智慧なり、力無畏も亦然なり。

とあります。つまり一切の諸佛といふも、本師法王たる阿彌陀佛一佛の廣大なる謂はれを知らせん爲めに、現はれて下された姿である、故に我々は唯此十方諸佛の根本たる本師阿彌陀佛の廣大なる恵みを頂くより外は無、といふのであります。

太子の御ことこのたまはく

われ入滅のそののちに

國王后妃とむまれしめ、

くにくに所々をすすめては。

數大の寺塔を建立し

數多の佛像造置せむ

數多の經論書寫せしめ

盜財田園施入せむ。

長者卑賤のみとなりて

經論佛像興隆し

比丘比丘尼とむまれても

有縁の有情を救濟せむ。

これは他身にあらざして

わか身これならくのみ

奉讚の一字一句も

みなこれ太子の金言なり。

す。之をみのりの上で申しますと、佛の恵みの限りも無い事は、殆んど、心にも言葉にも絶え果てた所である。其の廣大なる佛の恵みは、三世十方の世界に充ち満ちて下されて無量の佛が無量の世界に於て唯此一法を以て一切衆生を化益して居て下さるのである。我が淨土教で阿彌陀佛の本願と言ふのは此の廣大なる三世十方の諸佛の本源なる本師阿彌陀佛が、十方衆生を救はんとする大悲の願心を言ふのです。言ひ換ふれば我々十方の衆生が皆救ひを蒙る、其救ひの根本が阿彌陀佛の本願であります。若し此の本願ましますば、我々十方の衆生は何んなにしても、到底救はれる源が無い。佛教は八萬四千有つても、十方衆生最後は皆此の根本の阿彌陀佛の大悲本願の御親心を聞かせて貰つて、始めて救はれるのである。我々如き罪の深き、迷ひの永き者でも此本願の御心を頂く處で始めて親の傍に行く事が出来、一味御同朋御同行として共に恵みを頂く事が出来るのである。つまり八萬四千の法門といつても、結局阿彌陀佛本願の外には無いのです。之は何處迄も深く味ふ事が出来る、味へば味ふ程彌々限無き味はひを發見するのであります。

親鸞聖人は「略文類」の畢に於て、此の味を明かに御示し下されてある。

誠に知んぬ、大聖世尊世に出興し給ふ大事因縁は、悲願の眞利を顯はして、如來の直説と爲し給へり、凡夫の即生を示すを大悲の宗致と爲す。茲に因て諸佛の教意を闡ふに、三世の諸の如來出世の正しき本意は、唯阿彌陀佛の不可思議願を説かんとなり。云々

大聖釋尊が此世に出興して下されて、我々衆生の爲めに大法をお説き下された大事因縁も、結局如来の直説として、阿彌陀佛大悲本願の眞利をお示し下されたに外ならぬのである。即ち我々凡夫が恵みによりて、須臾の間に佛の國に生れさせて頂く即得往生の本願、信の一念に光明中に入らせて頂く所の即生の大悲をお傳へ下されるのが、釋尊出興の宗致であつた、大聖出世の本意は此の外に無い。之によつて十方三世の諸佛が、十方三世の世界に於て、一切衆生の爲めに各法をお説き下されてある。其諸佛如来出世の本意も何かといふに、唯此阿彌陀佛の不可思議願を説くが爲である。即ち南無阿彌陀佛の一法を説く爲めに、十方の世界に十方の如来が顯はれ給ふのである。實に心にも言葉にも言ひ盡せぬ廣大の恵みであります。

抑此の淨土の教をば、初めは一代佛經中の一個の教を位に、誰でも軽く思つて居るのである。けれども決してそんなに軽い教法では無いのです。我々は日夜人生に苦しんで、色々と煩悶の生活を續けて居るのであるが、此十方の衆生を大悲の阿彌陀佛は一子の如く憐念し、哀れんで居て下さるのである。大經の中には

諸の庶類の爲に、不請の友となり、群生を荷負して、之を重擔と爲す

ともある。即ち佛の方より我々に心を注いで下され、我々の方より請はざるに、如来の方から不請の友となつて、我々を救つて下さるのである。一切衆生の痛苦を一身に引き受けて、重荷と爲て居て下さるのである。實に有り難き御文であります。

す。又或は  
不請の法を以て、諸の梨庶に施す、純孝の子の父母を愛敬するが如し

ともある。此方より請ひ求むるに非ずして、佛より不請の法を以て一切衆生に施して下さること、恰も孝子が父母を世話して喜ぶやうだと、知らせて下されたのである。之等の文は大經の初めに一切菩薩の無量の行願を説かれた中の文であります。併し之等菩薩の根本が、即ち阿彌陀佛の大悲本願である。此の本願に遇ひ奉らば、我々衆生は如何しても安心は出来ぬのである。此の佛の親心を開かせて貰は無かつたら、我々は永久に痛苦を免れる事は出来ないのであります。

一昨日は豫てより度々お話致した福間久米吉氏の送葬でありました。先日來福間氏が信仰に入られた道筋に就きては、度々申したから、皆さんが能く記憶の事と思ひます。氏は終に此の十七日に、美はしく往生の素懷を遂げられたのであります。丁度今月の十日前後より、段々重體になられたのであります。既に皆さんが御存知の如く、氏は信仰によつて大安心を得、眠るが如く安らかに逝かれたのである。私は丁度其の絶息の前に駆けつけて、都合よく臨末に遇ふ事が出来ました。勿論危篤と聞いてからは忙がしい中からも度々参つたのであります。多量の人が臨末に遇へ無かつたに係はらず、私は不思議にも其日千住の小學校に参りまして、歸りに寄りますと間無しに臨終で、最後の病床に侍して念佛しながら、あり／＼極樂へお出になる有様を手に取る如く拜ませて頂きました。聞く處によると、其前に二三回も呼吸の絶えた事が有つ

た相であるが、私は其最後の時に旨く行き合はせたのであります。夫から菅瀬さんが經を讀まれる、私は又其方が存命中に書き遺された「獲信の記」と「歳末の記」といふ二つの文章を拜讀して、何とも言へぬ有り難き御縁に遇せて貰つたのであります。其文章の一言一句が、今息を引き取る人が、其處に在る遺族の人達や、臨末に待して居る人達に、廣大なる佛のみ心を示される心地がして、自分が讀んで居ながら、恰も亡くなる人の心よりの聲を聞けるが如く、實に何とも言へぬ有り難き感に打たれたのであります。其時の私の感想を追うて御話する前に、先づ其の二つの文章を皆さんに聞いて頂き度いと思ひます。(獲信の記は本年の本誌第一號告白欄に掲載したれば、茲には略す。朗讀の間に低泣せる人あり)

### 歳末之記

自分は片眼を失ひ、口も利けず、一耳又用をなさず。絶えざる痛みに苦みながら、今度は今度とは回復を豫期して七回の手術を受けたる今日にても、猶快復の期知り難し。然らば余が妻余が子の情として、余の此の病狀に同情を寄する事、決して少からざる可し。然れども佛の袖にすがり、佛の慈光に包まれたる今日の余は、心安らかに高く且廣き地にある故に、佛恩を感謝する外、少しも不足不平を感じることなし。余にして若しこの病氣に罹ることなからしめば、或は今日此の頃は百萬の富を積むを得、その財寶のため世俗の名を高め得たる事も知るべからず。もし然らば其富に頼りて、余が子孫は奢侈に耽り、余も現世生存の趣味

を解せずして終り、又其臨終に際しては、苦惱煩悶の中に其命を了することなるべし。然るに幸にして此痛苦に依り佛恩の宏大無邊なるを味ひ得て、靜平安易の裡に日を送るを得たるは、余の最も幸榮とする處なり。若しこの病なく、この幸福なく、無趣味平凡昨年如く健全ならば、利慾を以て來問すべき輩のみなるべきに、現時にあつては然らず。一方、余の病患に對して誠心誠意より同情を寄せらるゝ多くの人を得、又他方には余が信心歡喜の狀態により、同行なる未見の知人をすら、得るに至りしは、誠に余の多幸にして、一念此の佛恩を感想すれば、病氣より來る苦痛不自由の如きは、少しも余を煩すことなし。汝等は余の病苦を憐れみ、又看護に餘念なきが故に、歳暮に際し、何等世俗の行事にたづさはる事なく、又迎春の準備をなさざるが故に、恰も不幸なる新春を迎ふるが如き感あるべしと雖も、實は然らず。この送歳迎春の樂の如きも、決して物品の贈答などへのみ心を奪はるべからず。其等の事は唯虚禮のみ。空想のみ。之に反して無量無限の慈悲を載ししこの歡喜の心中は、平安にして、四圍は皆な靜穩の間に、佛と共にこの新歲を迎るを得るは、過去幾十回の越年に比して、無二の幸福なるを喜ばざる可らず。此歳暮に當り、決して汝等の誤解によりて悲むべき新春なりとの考を起さざる様、一言の注意を與ふ。余は兒等の父として夙にその龜鑑たる可きを庶幾ひたるも、未だ嘗て其事蹟なかりしを耻ぢたり。然るに今回佛の慈光に歡喜するの一事は、慥に汝等の龜鑑たる可きを信ず。病苦久しくして難澁云ふ可らざる中にあ

りて、猶ほ心安らかに清き日を送りて、何等不安の念なきは、全く如来の恩徳に浴し、法悦中に呼吸する賜なり。汝等子孫決して忘却する勿れ。

此の二つの文章を讀みました時、如何にも親が直々子供の爲めに言はれる心が、顯はれて、一同が深き感に打たれたのであります。そして福間氏は随分長き病苦であつたにも係はず、信仰の力で斯の如く平安に終られたのである。

近頃私は色々の人々が、信仰に入られる有様を目撃しまして、殆んど不可思議の感に堪えぬのであります。此福間氏の如きも、私は青年時代の事は能く知りませぬが、從來随分鋭く實業界に敏腕を振られた人であるといふ事である。然るにもう人力で堪えられぬといふぎりぎりまで達して、忽然として「余は佛陀が吾人を助け給ふ」と云ふ聞きしものにあらずや」「(獲信之記)と氣が附かれた。茲に氣が附かれたといふ事が、實に貴き所でありませぬ。余は佛陀が吾人を助け給ふと云ふを聞きしものにあらずや」と聞えた所が、佛の親心が届いて下された時である。先程より申す如く、我々十方衆生は昔より大悲の御哀みを蒙つて居る、今も現に此の哀れみの中に在るのである。然るに我々は現世の生活に心を奪はれて、佛の親を忘れ、唯世上の事のみを心苦めて居るのである。而も其矢先きに佛陀は廣大の大悲心より、善巧方便を以て、最後に「余は佛陀が吾人を助け給ふ」と云ふ聞きしものにあらずや」と氣附かせて下された。一念茲に氣が附いて來ると、もう今迄の勿體なかつた事、すまなかつた事間違てあつた事が、一時

れ無い。之は故人が生前に於て、或は墓參とか、或は散歩とか、斯ふいふ家庭的の場所には一家團欒して行く事を好まれたが、公開の席には決して婦人を出され無かつたのに、則られたの相でありませぬ。殊に此の日は雨で、雨のしとしとと降る中で斯くの如く壯嚴に式を擧げられたのであるから、一層の嚴肅を加へたのである。

其處で私の此時の感想を申すと、新の如く清らかな、如何にも質素な、何處迄も純潔な葬列の中に加はつて、我々は馬車の中で殆んど居るにも居られぬ。皆一様に口に念佛の聲が溢れるばかりである。如何しても自分の心を表はす方法が無いから、上杉君が皆んなで阿彌陀經の訓讀を仕ようと云ひ出された。如何にも最もであると、夫から皆な馬車の中で阿彌陀經の訓讀をさせて頂いたのであります。處が私は昨日來度々此事を言ふのであります。私は從來度々阿彌陀經を拜讀して居るのである。けれども此時程有り難く頂いた事は今迄に無かつたのである。

嘗つて長子甲松君が、私に話しに來て呉れと言つて來られた時に、私は遠慮なく申したのである。君は親の心を安んずる爲めに、親に法を聞かせ度いと言ふのであるが、併し信仰の結局は、佛のみ國に生れさせて貰ふ所が肝要なのである。尙ほ進んで言へば、先づ君自身が安心して、設ひ親が死なれても、自分も最後には佛の國に生れて、親と遇ふ事が出来るといふ覺悟を以て、親に向ふ事が大事である」と申したのであります。且つ又私が親の臨末に待して眞實證の靈境を知らせて貰つた事をも、お話致した事であつた。で私は斯くの如

に知れて來て、喜ばずに置かうと思つても喜ばずには居られ無い。此の一念佛の大悲に氣附かれた點が、實に福間氏の大信仰の源であります。偕て一度茲に氣が附いて來ると、殆んど人生の凡ての苦味は皆消えて仕舞ふ。内心の問題も、肉體の問題も、乃至死ぬ事迄がもう問題で無くなつて仕舞ふのである。福間氏は、余は佛陀が吾人を助け給ふといふを聞きしものにあらずや」と、氣が附かれ一念に、恵みの中に救はれたのである。既に氣の附いた時は、もう救はれて居られたのである。而して其佛の恵みに導かれて、斯くの如く美はしき最後を遂げられたのである。

偕て亡くなられて後の事は、細かくは申させぬが、葬式等も全く今の「歳末之記」と同じ意味で、凡ての虚儀虚禮をさけて、會葬者の如きも心から會せんと欲する人丈けに止め、別に世間へは報知もせられ無かつたのである。而して平日話して參つた管瀬氏を始めとして、私共上杉多田の兩君、先輩として前田村上の二博士、外に泉君と、此丈けが黒の衣黒の袈裟で棺を送つたのであります。去りながら子の情として、親に盡し度いと思はるゝ丈は遺憾無く盡されたのである。次男の君が神戸に於て園藝をやつて居らるゝので、色々美はしき純潔なる花を充分に取り寄せて棺の馬車に綺麗な花飾りをつけた。又生前非常に音楽を好まれたさうで、哀悼の曲を奏する樂隊を附けられた。而して先づ始めに音楽、次に私共の馬車二臺、次に今の美はしき花で飾られた棺の馬車、次が遺族といふ順序で、遺族の方は皆徒歩で棺に順はれたのであります。又婦人の方々は家で焼香をせられた丈で、式場へは出ら

く極樂の事は従前より深く喜ばせて貰つて居つたのであります。此度の事で私は、殊に阿彌陀經にある極樂の有様が、あり／＼眼前に見ゆるが如く、一段と深く喜ばせて貰つたのであります。故に昨日は朝學舎で彼岸の勤行を致しまして、其時舎の諸君にも此事を話し、阿彌陀經を拜讀した。夫から巢鴨の監獄へ參つても、囚人に對して、お前等は彼岸にはいつも阿彌陀經を聽聞するが、然し其意味を知るまいと言つて、阿彌陀經の御説法を始から終迄話して聞かせた。幾千の囚徒は皆聲を飲んで聽いたのである。又九段の第二求道會に於ても、私は矢張り此事を申し上げて、阿彌陀經を拜讀致したのである。そんな具合で、又晩には家庭でも之を語り聞かせたのである。て今日は皆さんにも又私の此の感じを聽いて頂き度いと思ふのであります。

抑今申すが如き有様で、清らかなる花の棺に從つて、哀れなる音楽を耳にしつゝ、阿彌陀經を拜讀したのであるから、阿彌陀經にある一々の極樂の有様が、實に能く明了に、さながら眼前に顯はれた如く、はつきりと頂く事が出來たのであります。私は從來とても阿彌陀經の極樂の有様を有り難く思つて居ぬてはなかつたが、此時程明了に拜んだ事は無いのである。もう此時は殆んどさき透る如くはつきりと、極樂の様子を想見させて頂いたのである。極樂が如何にも經文通りの有様に違ひ無いのみならず、又阿彌陀經にては釋尊が頻りに舍利弗を呼びかけて、舍利弗々々々とさも親しげに言つてお出になるのです。之等の味も實に有難く感じたのであります。夫故今日之をお話するには、勢ひ阿彌陀經を讀まねばならぬ

事となりませんが、併し之を機會に皆さんにも一度聞いて置いで下されるのが善いかも知れぬ。初めは部分的に讀む考て有りましたけれど、どうも全體を讀まねばまともなぬかと思ひます。普通に經文は序分、正宗分、流通分の三つに分れるのである。序分は先づ其經を説くにつきての準備を説いた部分で、設へば茲の講話をするにも、先づ皆さんがご集まり下さる、夫から鈴が鳴る、始まるといふ順序で、茲迄の準備を説いた部分が序分です。次に正宗分といふは正しく其經の本文である。最後に流通分といふのは、遷代に流通すると言つて、其結文を永く後代に傳へるといふ事を書いた部分である。つまり結文です。私は昨日丈けて阿彌陀經を丁度四邊拜讀した。今讀むと五邊になります。(之より阿彌陀經を拜讀す)

是の如く我れ聞き給へりき。一時佛舍衛國の祇樹給孤獨園に在しまして、大比丘衆千二百五十人と俱なりき。皆是大阿羅漢なり。……是の如き等の諸の大菩薩、及釋提桓因等の无量の諸天大衆と俱なりき。

初めに釋尊が舍衛國の孤獨長者が寄附せられた祇樹給孤獨園に、是等の大阿羅漢や大菩薩や諸天大衆と共に居られたといふのである。即ち茲迄が所謂序分である。之から彌々説法が始まるのである。

爾の時佛長老舍利弗に告げ給はく、是より西方十萬億の佛土を過ぎて世界あり、名けて極樂と曰ふ、其土に佛まします阿彌陀と號す。……又舍利弗、極樂國土には七重の欄楯、七重の羅網、七重の行樹あり、皆是れ四寶を以て周匝し圍遶せり、是故に彼國を

三惡道の名なし、何かに況んや、實に是の諸の衆鳥有らんや。皆是阿彌陀佛法音を宣流せしめんと欲して、變化して作し給ふ所なり。舍利弗彼の佛國土には、微妙の音の行樹、及寶の羅網を吹き動かすに、微妙の音を出す。譬へば百千種の樂の同時に俱に作すが如し。是の音を聞く者、皆自然に念佛念法念僧の心を生ず。舍利弗、其佛國土には、是の如きの功德莊嚴を成就せり。

さて之より彌々阿彌陀佛を説かるゝのである。舍利弗、汝が意に於て云何、彼の佛を何の故ぞ、阿彌陀と號する。舍利弗、彼の佛の光明無量にして、十方の國を照すに障礙する所無し、是の故に號して阿彌陀となす。又舍利弗、彼の佛の壽命、及其人民無量無邊阿僧祇劫なり。かるが故に阿彌陀と名く。舍利弗、阿彌陀佛成佛より已來、今に十劫なり。……功德莊嚴を成就せり。

之よりは其國に生るゝ我々の事をお説き下さるゝのである。又舍利弗、極樂國土の衆生と生るゝ者は、皆是れ阿鞞跋致なり。其中に多く一生補處有り、其數甚だ多し。……舍利弗、衆生聞かた者は、當に願を發し、彼の國に生れんと願すべし。所以はいかん、是の如きの諸上善人と、俱に一處に會する事を得ればなり。舍利弗少善根福德因縁を以ての故に、彼の國に生るゝ事を得可らず。

少善根福德因縁を以ては、阿彌陀佛の淨土には生るゝ事が出来ぬのである。然らば如何にして生れさせて頂くか、といふに、次に、舍利弗、若し善男子善女人有つて、阿彌陀佛を説くを聞き

名けて極樂と曰ふ。

又舍利弗、極樂國土には七寶の池有り、八切徳水其中に充滿せり、池の底には純ら金沙を以て地に布けり、四邊に階道あり。……池中の蓮華、大さ車輪の如し青き色には青き光、黄なる色には黄なる光、赤き色には赤き光、白き色には白き光あり、微妙香潔なり、舍利弗、極樂國土には是の如きの切徳莊嚴を成就せり。

又舍利弗、彼佛國土には常に天樂を作す、黄金を地と爲す、晝夜六時に曼陀羅華を雨らす、其國の衆生常に清旦を以て、各衣祴を以て、衆の妙華を盛つて、他方十萬億の佛を供養し奉る。即食時を以て本國に還り到つて、飯食し經行す。舍利弗極樂國土には是の如きの功德莊嚴を成就せり。樹あり、池あり、樓閣あり、花あり、音樂あり實に何とも言へぬ微妙清淨の趣きである。而して其國の衆生は衣祴に華を盛つて他方十萬億の佛を供養して、歸つて飯食し經行する。我々が朝起きて、先づ佛前に參拜して、夫から食事を取つて其の日の仕事にかゝるやうな有様とも思はれるのであります。

復、次に舍利弗、彼國には常に種々奇妙雜色の鳥あり、白鶴孔雀鸚鵡舍利迦陵頻伽共命の鳥なり、是の諸の衆鳥晝夜六時に和雅の音を出す、其音五根五力七菩提分八聖道分、是の如き等の法を演暢す。其土の衆生、是の音を聞き已りて、皆悉く佛を念し、法を念じ、僧を念す。舍利弗、汝此鳥は實に是れ罪報の所生なりと謂ふ事勿れ。所以は如何、彼の佛國土には三惡趣無ければなり。舍利弗、其佛國土には尙ほ

て、名號を執持すること、若しは一日、若しは二日、若しは三日、若しは四日、若しは五日、若しは六日、若しは七日、一心にして亂れざれば、其人命終の時に臨みて、阿彌陀佛と、諸の聖衆と現じて其前に在します。是人終らん時、心顛倒せずして即ち阿彌陀佛の極樂國土に往生することを得ん。舍利弗、我れ是の利を見るが故に此の言を説く。若し衆生ありて是の説を聞かん者は應さに願を發し、彼の國土に生ずべし。

「我れ是の利を見るが故に此言を説く」とは、たつた一言ではあるが實に有り難い御言葉である。凡て此の阿彌陀經の有り難き點は、大經では叮嚀にお説き下された處を、ごく簡潔にお示し下された所にあると思ひます。偈て之から以下は釋尊の廣大なる説法を、十方の諸佛が稱讚なされる事をお説きなされてある。話が大層遠くなりましたけれども、初めに申した「法王は唯一法なり、一切の無碍人一道より生死を出てたまへり」で、十方の諸佛は唯彌陀一佛道より出て給ふのである。此等十方三世の諸佛菩薩は、唯此の彌陀本願を説かんが爲めに出現して下さるのである。といふ味はひは、此の彌陀經に於て最も著しく顯はれてあるのです。今日は一つは此事を申したかつたのである。偈て諸佛菩薩の御導きて此の彌陀本願の親心を聽かせて頂いて、余は佛陀が吾人を助け給ふといふを聞きしものにあらずや」と氣がついて、思はず口に南無阿彌陀佛と稱へた時は、既に彌陀の攝取光中に納められた時である。是れやがて往生の定まつた時刻の極促であります。釋尊が、我れ是の利を見るが故に、此の言を説くと仰せられたも



茲である。聖人が「三世の諸の如來出世の正しき本意は、唯阿彌陀佛の不可思議願を説かんとなり」と仰がれた味も茲に有るのであります。偕て其の諸佛稱讚の文は何うかと言ふに、舍利弗、我が今阿彌陀佛の不可思議功徳を讚歎する如く、東方にも亦阿閃鞞佛、須彌相佛、大須彌佛、須彌光佛、妙音佛ましまして、是の如き等の恒河沙數の諸佛各其國に於て廣長の舌相を出して、徧く三千大千世界を覆ひて、誠實の言を説き給ふ。汝等衆生、當に是の不可思議の功徳を稱讚する一切諸佛に護念せらるゝ經を信すべし。

即ち釋尊が此の娑婆世界に於て、阿彌陀佛の不可思議功徳を讚歎せらるゝ如く、諸佛も又此の彌陀法を讚歎し、護念して居られるのである。猶ほ此の以下に於て、南方世界、西方世界、北方世界、下方世界、上方世界に於ても同様に諸佛が此の彌陀法を證誠護念して居て下さる事が、之と同じ文章で繰返されてあるのである。私は特に阿彌陀經に於て、此の六方世界を繰り反して下された點を、ひとさむ難有く感ずるのであります。嘗て救生徂來であつたか、誰であつたか、阿彌陀經を讀んで六方段に至り、實に愚な文章である、初めの東方世界文句を擧げて、已下四維上下又々此の如しとすれば、實に文派な名文になるものを、と言つたとかいふ話がある。成程文章から見れば、或はさうも考へられるかも知れぬ。けれど、も宗教は文章とは違つて、斯く飽く迄繰り反しつゝした點が實に難有いのである。設へば大槃若六百卷にしても、皆な同じ事が繰反してあるのである。清淨を説くとなれば、耳も清淨である、眼も清淨である、鼻も清淨である、口も清淨であ

多羅三藐三菩提を退轉せざる事を得。是の故に舍利弗、汝等皆當に我が語、及諸佛の所説を信受すべし。舍利弗、若人有つて已に願を發し、今し願を發し、當に願を發して、阿彌陀佛國に生れんと欲はん者は、是の諸人等皆阿耨多羅三藐三菩提を退轉せざる事を得て、彼の國土に於て、若しは已に生じ、若しは今し生じ、若しは當に生ぜん。是の故に舍利弗、諸の善男子善女人、若し信有らん者は、應に願を發して彼國土に生ずべし。

過古、現在、未來に於て、阿彌陀佛の國に生れんと願するものは、皆生るゝ事が出來ると教えて下されたのである。さて之迄て淨土の説法は終つて後は流通分の結びである。

舍利弗我れ今諸佛の不可思議の功徳を稱讚する如く、彼の諸佛等も亦我れ不可思議の功徳を稱説して、是の言を作さく。釋迦牟尼佛能く甚難希有の事を爲して、能く娑婆國土の五濁惡世劫濁見濁煩惱濁衆生濁命濁の中にして、阿耨多羅三藐三菩提を得て、諸の衆生の爲に、是の一切世間難信の法を説き給ふ。舍利弗當に知るべし。我五濁惡世に此の難事を進行して、阿耨多羅三藐三菩提を得て、一切世間の爲めに、此の難信の法を説く、是れ甚だ難しと爲す。……信受して、禮を作して去りき。

之て阿彌陀經一部は終つたのである。どうも讀めば讀む程難有く感ずるのであります。殊に經文全體の上に少しも理屈が無く極く直接に佛の境界をお示し下されてある。設へば「極樂には鳥が鳴いて居る。舍利弗、汝は此鳥を罪報の所生と思ふてはならぬ。舍利弗、極樂には三惡道が無い、如何に況んや

る、身體も清淨である、心も清淨である、乃至茲に在る本も清淨である、念珠も清淨である、机も清淨である、皆さんの着物も清淨である、何もかも皆清淨であると、斯ういふ風に説いたものが大槃若六百卷である。又眞を説く時は、花も眞である、風も眞である、大地も眞であると何處迄も、手を代へ品を替へして眞を繰り反してある。又或は空を説くとなれば、色も空である、五蘊も空である。一切凡てが空であるといふ風に他迄空を繰反してあるのであります。夫であるから初めて大槃若を讀む時は、何が書いてあるか、殆んど譯が解らぬやうである。けれども段々繰反し讀んで行く中に、いつとなく心に泌みて、有難くなつて來るのである。皆さんが、茲に講話を聞きにお出になるにしても、矢張り同じである。私は毎も同じ事のみ繰り反して居るのであるが、併し其中に何時となく皆さんが歡んで下さるのであります。南無阿彌陀佛にしても、又さうである。南無阿彌陀佛々々と、聲に出して稱へてる中に、御方便でいつとなくほんとの味はひに至らせて貰ふのであります。

次に稱讚淨土經といふ異譯の阿彌陀經には、此の六方段が十方段になつてある。之は必しも六方とか、十方とかと限られた譯でなく、詳しく言へば、無量の世界に無量の佛陀が稱讚なされてあるのです。偕て此の六方段が異ると次に、舍利弗、汝が意に於て云何、何の故ぞ名けて一切諸佛に護念せらるゝの經と爲す。舍利弗、若し善男子善女人有つて、是の諸佛の所説の名及び經の名を聞かん者、是の諸の善男子善女人、皆一切諸佛の爲めに共に護念せられて、皆阿耨

實の鳥があるものか。とか、或は「我是の利を見るが故に是の言を説く」とかと、凡てが皆此の具合で、實に力強く一言も動かぬ御教化であります。

私は先程も申す如くて、福間氏の送葬の御此經を拜讀して實に今更の如く難有く感じさせて頂いたのである。殆んど寶の樹や寶の池が有り、眼に見ゆるやうに思はれ、何とも言へぬ難有さでありました。又先日原氏の告白(前號所載)を承はつても、實に清淨報土の有様を偲ばせて頂く事が出来るのであります。福間氏も今は其處へ歸へられたのである。否福間氏のみならず、一切衆生が皆其處へ行くやうにと、十方の諸佛が十方の世界に於て、只彌陀の本願を説き下されてあるのであります。而して其本師法主が、實に我が阿彌陀佛である。聖人は彌陀經和讃にのたまはく

十方塵微世界の、念佛の衆生をみそなはし、攝取して捨てざれば、阿彌陀と名けたてまつる。

十方微塵世界の衆生を必ず攝取して下さる佛故、此の佛を阿彌陀佛と申したてまつるのであります。(三月二十二日)



聖傳

ジャータカ釋尊傳

第七 マカーデヅハ

世尊ジュタヅハナにましましし時、世を捨てしことにつきて語りたまへり。

一日僧等世尊の出家を褒め稱へつゝありしとき、世尊は集へる人々のうちに入り座につきて大衆にのたまはく、汝等の語りあへる話は何なるか」と。

「他事にあらず、主よ君が出家につきてのみ」と答へぬ。  
「僧等よ我は今世に於て出家せしのみならず、前世亦世を捨てぬ」と語り出たまへり。

今は昔、ウイデハ州なるミシラにマカデーヅハとて義ある明王ありき。八萬四千歳の長さ彼は王子として政府に政をとり威をもて敬はれぬ。かく永く世に在りしほとに、一日彼は理髮師に向ひて曰く「我が善き理髮師よ、汝等が頭に於て、白髪を見出さば、我にしらせよ」と。

かくて又永き月日はすぎさりぬ。されど遂に一日理髮師は白髪の実黒なる毛髪のうちに一筋まじれるを見出した。而して彼はそを王につけて「君の毛髪中に一筋の白髪ありオ、王よ」といひぬ。

「ぬき去れ、而して我手にのすべし」と命じたり。されば、彼は金の毛ぬきもてそをぬき去り、王の手にのせぬ。

此時王の壽命は、まだ八萬四千歳の餘命ありしが一度此一筋の白髪を見しより、王はさながら死の魔王の彼に近づきしごとく、又恰かも火宅の内に在るがごとく深く不安の念に打たれぬ。されどおもへらく「オ、愚なる哉、マカーデヅハよ、よしや白髪は汝の上に生ずとも人の心を滅ぼす處の脆弱なる意志と情欲を汝は未だ取り去る能はざるや」と。

彼のかく一筋の白髪をみて思惟に思惟を重ねるうち、彼の心は燃ゆるが如く玉なす汗は流れて、衣を濡らし、もはや堪ふべからずなりぬ。遂に「我今日世を捨て、正しき生を送るべし」と決心したり。

王は理髮師によき村をあたへ、又彼の長子をよびて曰く、「我が子よ、白髪は我頭に見えそめぬ、我ははや老ひぬ、我人として出來うる限りの望はとげたり、今こそ後世を願ふべき時なれ、世を捨つべき時なれ、汝は王位をつぐべし、我は教の人となり、マカーデヅハのマンゴー園といへるに住し心を鍛練すべし」と。

彼の臣等は王の此決心をなし、をき、彼に來り、曰く、「王よ、王の世を捨てたまひしは何故なるか」と伺ひぬ。此時王、彼の手に白髪を取りて此偈を言へり。

頭のみえし白髪は  
われに來りし御使そ、  
我世の夕おごそかに

さびしきみ手をさしのべて

さよさおもひをいだくべく。

是を語り終りて、直ちに王位を退き其の日はや比丘となりぬ。先に彼の云ひし如くマカーデヅハのマンゴー園に住み八萬四千歳の間よく衆生に善行をなし、又思惟を凝らしぬ。彼遂に世を去りし時、ブラマ天に生じ、次に又ニシなる名を次てミシラの王となり、彼の離散せる家族に合しぬ。其後又マンゴー園に比丘となり衆生を利益し、又ブラマ天にかへりぬ。

師此説教を終へしとき、四諦を説きたまへり。或者は第一の果を得、或者は第二、第三の果を得たり。世尊因縁を教へてのたまはく、「彼時の理髮者とはアーナンダにして王子とはラーフラ、マカーデヅハとは我なり」と。

第八 幸福なる生涯

一時、佛アヌーピアのマンゴー園に在りし時、幸福者バーデヤといへる長老につきて説きたまひし事ありき。

バーデヤは始め六人の貴族と共に佛陀に歸命し奉れり。其中、バーデヤ、キムピラ、バィグ、ウバールの四者は阿羅漢なり、アーナンダは涅槃の第一果を證し、アヌルダは三世(過去、現在、未來)の智を得、デバダッタは禪定の力を獲たり。此等の六人に關する譚は、カンダハラージャータカに於て述べらるべし。

一日敬虔なるバーデヤは、嘗つて彼の王たりし時何くれと

なく束縛をうけ、恰かも天使の如く守護されし煩はしさに憐々として王の寢臺に横はりつゝありし昔を想起しぬ。然るに今は何の煩もなく自由に森や荒地をそこはかとなくさまよふ自由なる羅漢の樂しさを歡べり。かく昔と今の變れる様をおもひくらべつ、おもはず「オ、幸なる哉幸なる哉」と歡喜の叫聲を發しぬ。

比丘等此事を世尊に告げ奉りて「バーデヤは阿羅漢果につきて語りつゝありしと。(幸福は阿羅漢果或は涅槃の義即ち完全なる平和、善、智慧の意)

世尊答へてのたまはく、「比丘等よバーデヤの歡喜踊躍せるは今のみならず前世亦然り」と。比丘等の乞により生死輪廻のうちにかくれたる出來事を明らかにしたまへり。

今は昔ベナレスにブラマダッタ王たりし時、菩薩は其西北の國に富めるブラマンとなりぬ。されどつらく世俗の罪惡をおもひ宗教に身を捧ぐることに益あるかを感じたれば、彼は世を逃れいてヒマラヤ州に行き隱者の生を送り、八勝道を修しぬ。而して彼の弟子は大は増加して五百の比丘に侍せらるゝに至れり。

雨期の來るや、彼はヒマラヤを去りて大衆と共に村、町をよぎりつベナレスに旅しぬ。其處に彼は王の保護を受けて、王室の園に住處をとりたり。かくて雨期四ヶ月の長さもいつしかすぎければ王に暇を告げて再びヒマラヤに歸らんとせり。されど王は彼を止めて「汝は老ひたり、何故にヒマラヤに行かんとするや、汝の弟子を彼處に送りて、汝は此處に住すべし」と命じたり。

し」と。  
されば菩薩は五百の比丘等を彼の高弟に托してヒマラーヤに送りて曰く「汝はヒマラーヤに此等のの人々と共に行き住すべし、我は此處に止まらん」と。

此高弟は教の爲に廣大なる王國を抛ちし貴き信者なりき。而して禪定を重ねるうち内的實驗の八種を獲たり。

彼はヒマラーヤに比丘等と共に日を送りしが一日、彼の師にまみえんと思ひ立ちしかば、比丘等に告げて曰く「汝等は此處に靜かに暮すべし、我は我師を敬はん爲に行かん」とす、而して直ちに歸り來るべし」と。

彼はやがて彼の師の住する處に到り、師を禮し親しき子弟の情を温めぬ。而して後彼は師の傍に坐具を擴げ、横たはれり。

折しも王亦園に彼の師を見んとてゆきぬ。恭しく彼を禮し謹しみて一方に座したり。此時、弟子は王の來りしを見しと雖、敢て立たんともせず、先の如く横たはりて、心の嬉しき餘り、「オ、幸なる哉幸なる哉」と歡喜の歌を唱したり。

王此比丘を喜ばず、菩薩に向ひて曰く、「師よ此比丘は彼の心中大に満足せりと見ゆ、彼は安樂に横たはり、歌をうたへり」と。

「大王よ、此比丘は嘗て汝の如く大王なりき、彼は常におもへらく「我は昔俗人として貴人の華奢に馴れ、多くの人に支へられつゝまもられしが、我此の如き歡喜は有せざりき」と、されば彼は禪定の喜と信の生涯の樂しさに、おもはず歡喜の歌をうたひしなり」と。

而してなほ深く大王を教誨せんとして

おのれをまもる人いらず  
まもらん人もなき人ぞ  
やすけき生を送るなれ  
愛や世欲のきづななく

王は此重誨をうけ、再び満足して宮にかへりぬ。弟子亦師に暇をつけてヒマラーヤ州にかへり行きたり。菩薩は絶えず禪定を修せしが遂に命終りてブラマ天にかへりぬ。

師かく語り終りてのたまはく、其時の弟子とはパーデヤにして、大衆の長とは我身是なりき」と。

行誡 上人

世尊 託胎  
あづまのまやのはその薄紅葉秋のやどりと見るが嬉しき  
世尊 出胎  
み佛にそゝぎまつれる眞清水にぬらさぬそてもなきあした哉  
世尊 出家  
檀特のみの松風さすて、かへりしこまのみちまどひけん  
世尊 降魔  
一しきりふるからをのゝむら時雨月には露もさばらざりけり  
世尊 成道  
うき雲をゆふへの風にはらばせて曉天てらすあかほのかけ  
世尊 涅槃  
今もなほくもりて空にのころらん其きさらぎの望の夜のつき  
同  
千代までと祈りしかひもなかりけり鶴の林は名ばかりにして

告白

我は罪惡の凝塊也

中里 庄五郎

去る八日九段の第二求道會へ伺ひました所、講話後信仰談話會がありまして、先生から私に告白せよとの御注文でしたが私しの愚鈍なる秩序的に御話しさせて戴く事が出来ませんでした、そゝしますと先生の御言ひなさるには、歸宅してから書て送れとの事でしたが、筆の足らぬ私しには是も仲々出来ません、けれども記して見ましよう。

私しは幼少の時から神經質で少しの事でも苦勞になり、夜も眠られぬ事も度々ありまして母に心配を掛けました、私しが十二歳の時、父か大病にて東京病院へ入院するやら又自宅で治療を受けるやらで、凡そ四ヶ年許り病床を離れる事か出来ませんでした母と姉が晝夜看病をする、家業は全廢同様でした、其時母と姉は毎夜呪文をとなへて不動様を拜みまして、病氣全癒を祈つて居りますので私しも子供心にも、父の病氣を早く全快致し母に安心をしてみたい許りに、一心に拜みましました、夫れから父の病氣も略ぼ平癒して、私しの信心と云ふとも追々薄らぎまして其後は信心などは愚夫愚婦を教ゆる方便位に思ふて佛様を信仰する等の事は少しもありませんでした。私し十九歳の時に、蠶業取締所の蠶種検査員見習と

して八王子へ行つて居りました時に、交際上酒を飲み初めまして酒を飲むとどんな苦勞な事が有つても能く眠れるので酒は私しの無上の樂みとして居りました、夫れが習慣となつて、段々澤山に飲む様になり、其結果酔ては魔窟へ足を入れても左程悪くとも思はず是れか世間普通であると、思ふて居りました、キリスト教の大道演説を聞た事もありましたが、宗教家と云ふものは人生僅か五十年か六十年を、なぜあの様に窮屈に送るだらう、働いて金を得て時々、交際上酒も飲むべし愉快に此世を送るべしだと思ひました、其後家業は別に怠ると云ふ程の事は有りませんでした、行爲は別に變らずして酒を止めようなどと云ふ氣は少しもありませんでした、最後に是れが私しを信心に御導き下された阿彌陀様の御手廻しだと、後に非常に難有感しました事は、私しが一婦人の奸計に陥り若し此事が世間へ知れたら、自分の名譽はどうなるだらう、是非共秘密に解決したいと、名利と物欲から割出して種々無量の考を起し、苦みく夜もろくく眠られぬ位でしたから毎夜家出して酒を飲んで飲み廻り苦みを忘れようとする、妻は心配して産後精神に少しく異状を呈する、家内に風波は毎日のように起るやけになつて、毎晩出掛て暴飲をする、産れた子は六十日許りにして病死して仕舞ふと云ふ様なわけで、他人から見たら、丸て狂氣の沙汰でしたらう、今日から思ひますと地獄を現出した様なものでした、恰も其當時恩師近角先生には不可思議の御縁にて當地へ御出張下された、私しは其夜親類に相談する事がありました、參つた所がどうゆう都合でしたか相手が來ませんでした、私し一人て酒を澤山馳走にな

つて泥酔して、寺に佛教演説があるそ、だから、悪い事ではあるまい。聞いて見やう位で参りました、所が先生は第二席であつた。そうだが、私しが第一に感しましたのは先生が如何にも喜しそ、御話をなされて居るのでした、私しは苦んで居る際でしから殊更でした、宗教家と云ふ者は、あの様に毎日喜びの生活をして居るものであろうかと思ひました、其時拜聴しました事は、詳しき事は記憶しませんが、釋尊が生老病死の四苦を解脱せんが爲に皇太子の御身分を捨られ、長年の間種々無量の御苦勞をなされ最後に、佛陀大覺の位に登られたと云ふ事を承りました、私しは苦を解脱せんが爲めと云ふことが、非常に身にしみて體の前へ出るのも知らずに、一心に聞いて居りました、酔もさめてしまひ歸宅して寢所に、入つても能く眠れませんが、既往の行爲を追想しては、如何にも淺間敷く今日迄宗教家は窮屈だと思つて居つたは大なる誤り、眞面目な生活はどれだけ快樂か知れぬ、眞正の一家團樂と云ふとも宗教の上でなくては得られぬと云ふとに氣を附けさして戴ては、居ても立つても居られない、早く私しも先生の様に、喜しき生活をして見いと思ひましたから、世間へ何事が知れ様が財産を減らそうがかまわないと決心して、婦人の云ふが儘に私しは何の意見もなく解決してしまひました、其後は自分の過去の罪惡を思ひ出して殘念に堪へられず、又世間の人に顔向けするのも心地が能くない、早く先生に御目に掛り自分の經歷を申上て御教示を願たいと、思ひましたけれども折がな、其年の八月出京して本郷の御宅へ、伺ひまして色々有難御話を承り且つ信仰餘瀝を一冊頂戴致して歸りの汽車中から、

是れは昨年末の事でしたが、少々普請を初めました、一夜朋友が二三人で雑談を交へて居ると其内の一人が、卜者を呼び込で見て貰いました、其時卜者が私しに本年は普請を御止めなさい、強て御やりになると病人が出来ますと申しました、翌日姉が夫れを聞いて、止めにしたら宜しかろうと申しますから私しは答へました「あなたは何所の者だか知れぬ卜者の言を信じなされるか、親鸞上人様の御言を信じなされるか、我が開祖上人は餘道に仕ふる事を得ざれ、吉良日を見る事を得ざれと申されてあります、私しの心には方位の善惡や吉良日はありません、病人が出来ようが私しが死のうとも夫れは佛様の御命令です、佛様に御まかせした體は何とも思ひません」と申しました、所が姉が答へませんでした、本年一月より母が眼病に掛り引續き子供も病氣に掛りました、若しも私しが以前であつたならば、それこそ非常に心配して工事を中止するてしたろう。

「大願海の内には、智慧の波こそなかりけれ、弘誓の舟に乗りぬれば、大悲の風にまかせたり」と云ふ御和讃は、味へば味ふ程難有戴けます、私如き愚鈍な人間でも弘誓の舟に乗せて戴けばこそ、如何なる事件が出来ても安心して世渡りをさせてもらふことが出来ます。

南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。

明治四十一年三月十六日

\* \* \* \* \*

拜讀し初て四五回も目を通しました所が、讀めば讀む程自分の罪惡なる事淺間敷事が深くなりまして、他人が悪く云はふが、何と云はふが不平は言ふまい自分程恐ろしき、罪惡な人間はないと眞に思ひました、そう思つた許りにても何となく晴々として重荷を下した様な氣持ちになりました、其時から酒が追々進まぬ様になり、此所て禁酒と云ふとはなくて止めて仕舞ました、今日では丁度、中毒せられた食物を見る様な氣持ちで泥酔した人を見ると自分の既往の事を思ひ出して、頭が痛む心地がします、夫れて分つた様で知れなかつたのは佛は慈悲の塊だとか慈悲か塊て佛になつたとか、云ふ事でした。一對佛様は人生に向て、如何に慈悲を垂れ賜ふものであろうかなどと考へ込んで仕舞て、どうも判然しませんでしたから、其後先生より色々御話を承る内に、人間は順境だの逆境だの善だの惡だのと云ふて喜んだり悲んだりして居るが、皆人間が定めた順逆善惡で皆夫れが佛陀御引接の賜物、阿彌陀様の御手廻してあると云ふ事を承りました、そ、して見れば、私しが幼少の時父の病氣で苦んだのも、私しが婦人の奸許に陥つたのも、子供の死んだのも、私しを御導き下さる御方便御引接の賜物であつた、惡むて居つた婦人、我子皆大善智識であつた、其他何もかも是が佛様の慈悲の内てないと云ふとはないと氣を附けさして戴た時の嬉しさ、難有さは踊り上る様で何とも申様がありません、其後今日迄數年間は時には、不平も起る、腹の立つ事もありましたけれども、仰て、佛様の慈悲の事を思ひますと、あ、私しが惡かつたと直に喜びに變らせて戴き、其度毎に不知、稱名念佛する次第であります。

講義

歎異鈔

第七章

近角常觀

念佛者は无碍の一道なり。そのいはいかんとならば、信心の行者には天神地祇も敬伏し、魔界外道も障礙することなし、罪惡も業報も感ずることあたはず、諸善もそよぶことなきゆへに、无碍の一道なりと云云

此章は南無阿彌陀佛を稱ふるは絶対無碍の一道であることを示された『歎異鈔』中最も簡潔なる章なれど、最も力強き絶対の力絶対の信を示された所である。親鸞聖人が南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本の大行を如何に仰き、如何に信じたまひしかを拜すべきである。抑々無碍の一道といふことは『論註』より出て來りたのである阿耨多羅三藐三菩提を譯して、無上正遍道と云ふ、其道を釋して曰く、

道者無碍道也、經言十方無碍人、一道、出、生死、一道者一無碍道也、無碍、者謂、知、生死即涅槃、如是等、入不二法門無碍、相也

聖人は之を『行卷』に引用したまひてある、『行卷』には唯『論註』を引きたまひたるのみなれど歎異鈔の此文より反照してみれば明かに如來の本願力たる大道のことを示されたるのである。論註の前の文に菩薩如、是修五門、行、自利利他、速

得<sup>レ</sup>成<sup>レ</sup>就阿耨多羅三藐三菩提<sup>ヲ</sup>故<sup>ニ</sup>佛所<sup>レ</sup>得法<sup>ヲ</sup>名<sup>ニ</sup>爲<sup>ス</sup>阿耨多羅三藐三菩提<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>得<sup>レ</sup>此菩提<sup>ヲ</sup>故<sup>ニ</sup>名<sup>ニ</sup>爲<sup>ス</sup>佛<sup>ト</sup>、即ち法藏菩薩が自利利他して得たまひし道なれば、即ち南無阿彌陀佛の一道たるは毫も疑ふ餘地はない、而して此に引ける經をば聖人自ら行卷次に詳かに引用したまひてある。曰く、

華嚴經<sup>ニ</sup>言<sup>フ</sup>文殊<sup>ノ</sup>法<sup>ハ</sup>常<sup>ニ</sup>爾<sup>リ</sup>、法王<sup>ハ</sup>唯一<sup>ノ</sup>法<sup>ナリ</sup>、一切無碍人<sup>ハ</sup>一道<sup>ヲ</sup>出<sup>ス</sup>、生死<sup>ヲ</sup>一切諸佛身<sup>ハ</sup>唯一<sup>ノ</sup>法身<sup>ナリ</sup>、一心一智慧<sup>ナリ</sup>、力無畏<sup>モ</sup>亦然<sup>ナリ</sup>、

『六要鈔』によるに六十華嚴難明品の文である、如何にも絶對唯一の文殊師利法王子の法を示されたものである、一切無碍人とは十方諸佛のことである、今十方諸佛を悉く彌陀一佛道に結歸せられたのである、抑々文殊菩薩は絶對唯一を示さるゝ大法である、華嚴は一即一切、一切即一の法門である、古來略華嚴と稱する『普賢行願讚異譯文殊師利發願經』には十方三世一切の諸佛を遂に阿彌陀一佛に結歸してある、曰く、

普賢菩薩名、諸佛第一子、我善根廻向、願悉與彼同、身口意清淨、自在莊嚴刹、速成等正覺、皆悉同普賢、如文殊師利、普賢菩薩行、我所有善根、廻向亦如是、三世諸如來、所歎廻向道、我廻向善根、成滿普賢行、願我命終時、除滅諸障礙、而見阿彌陀、往生安樂國、生彼佛國已、成滿諸大願、阿彌陀如來、現前授我記、嚴淨普賢行、滿足文殊願、盡未來際劫、究竟菩薩行

抑華嚴重々無盡の法門も入法界品に至り、彌陀念佛の二法に結歸する、求道者善財童子が彌勒菩薩の教を受けて漸次に南の方一百一十城を經遊して思惟觀察して一心に文殊に見へ

如是十方無量佛、咸各至心頂面<sup>ニ</sup>禮<sup>ス</sup>、

全く是れ無碍の一道の意味である、抑々此問題は頗る奥深き問題と考へる、先づ二三の暗示だけを與へて置かん、第一に『華嚴經』と『大無量壽經』とは文體に於て思想に於て確に連絡を有して居る、大經序分を見れば明瞭で、佛華嚴三昧の文字すらある、第二支那に於て五臺山を中心としての連絡である、

『續高僧傳』六に曰く

釋曇鸞或爲<sup>レ</sup>辯、未詳<sup>レ</sup>其氏、廬門<sup>ノ</sup>人也、家近<sup>ニ</sup>五臺山<sup>ニ</sup>、神迹靈怪逸<sup>ニ</sup>于<sup>レ</sup>民<sup>ニ</sup>、聽<sup>テ</sup>、時未<sup>ニ</sup>志學<sup>ナリ</sup>、便<sup>ニ</sup>往<sup>テ</sup>尋<sup>テ</sup>焉<sup>ヲ</sup>、備<sup>ニ</sup>觀<sup>テ</sup>遺蹤<sup>ヲ</sup>、心神歡悅<sup>シ</sup>、即便出家<sup>ス</sup>、

而して五臺山は『華嚴經』に説ける清凉山にして文殊の淨土と傳ふる聖蹟である、故に華嚴宗の根本地であり、亦念佛三昧の根本地である、佛陀波利三藏か遠く印度より五臺山を訪ひ、靈告によりて再び流沙を涉りて將來し來りたる尊勝陀羅尼にも阿彌陀如來極樂淨土の事が書きてある、又法然上人が和語燈錄にも示されたる如く法照禪師か五臺山に上り普賢菩薩の指圖により文殊菩薩に遇ふて、念佛三昧を授かりたることがある、又日本天台に於ても慈覺大師か入唐して五臺山に上り、常行三昧を傳へ、歸りて文殊樓院を建て、修行せられたが念佛である、第三に日本に於て法然上人淨土念佛門を開きたまひし前に恰も前驅者としてあらはれたる良忍上人の融通念佛宗は華嚴の一即一切一切の立場に於て念佛を修せられたのである、上に引用せる普賢行願讚の如きは其骨髓である、已上は唯古今を通じて華嚴と念佛との歴史的關係の一端を洩したのみである、

んとし、文殊によりて信を生じ、遂に五十三の智識に遇ひて道を求め、最後に普賢菩薩の行願によりて佛道に上ることを示されたのである、其善財童子が功德雲比丘の所にゆきて白て言く、大師云何して菩薩の道を修し、普賢の行に歸すべきと、是時比丘善財に告て曰く、我世尊知慧海中に於て、唯一法を知る、謂く、念佛三昧門なり、何んとなれば此三昧門の中に於て悉く能く、一切諸佛及其眷屬嚴淨佛刹を觀見して、能く衆生をして顛倒を遠離せしむ」とある、かく華嚴を初として其他諸經中に文殊の法は一行三昧であることを説きてある、安樂集の處々に出である、是れ諸佛を彌陀一佛に結歸する絶對唯一の大道である、抑々曇鸞和尚が世俗の君子に答へられたは即此一行の意である、唯信鈔<sup>ノ</sup>卷末に曰く、

曇鸞和尚碑文<sup>ニ</sup>法師常<sup>ニ</sup>修<sup>ニ</sup>淨土<sup>ヲ</sup>、亦每有<sup>ニ</sup>世俗<sup>ノ</sup>君子<sup>ニ</sup>來<sup>テ</sup>呵<sup>テ</sup>法師<sup>ヲ</sup>曰<sup>ク</sup>、十方佛國皆爲<sup>ニ</sup>淨土<sup>ニ</sup>、法師何乃獨意注<sup>ニ</sup>西<sup>ニ</sup>、豈非<sup>ニ</sup>偏見<sup>ノ</sup>生<sup>レ</sup>也、法師對<sup>テ</sup>曰<sup>ク</sup>、吾既凡夫、知慧淺短<sup>ナリ</sup>、未<sup>レ</sup>入<sup>ニ</sup>地位<sup>ニ</sup>、念力須<sup>ニ</sup>均<sup>ニ</sup>、如<sup>ニ</sup>似置<sup>ニ</sup>草引<sup>ニ</sup>牛<sup>ニ</sup>、恒<sup>ニ</sup>須<sup>ニ</sup>繫<sup>ニ</sup>心<sup>ニ</sup>槽<sup>ニ</sup>、豈得<sup>ニ</sup>縱放<sup>ニ</sup>、全<sup>ニ</sup>无<sup>ニ</sup>所<sup>ニ</sup>歸<sup>ニ</sup>、雖<sup>ニ</sup>復難者<sup>ノ</sup>紛紜<sup>ニ</sup>而法師獨決<sup>ニ</sup>下略<sup>ニ</sup>、

道綽大師は曇鸞の滅後此碑文を見て、忽ち涅槃の廣業を捨て、念佛に歸したまひたのである、安樂集に一行三昧を處々に示さるゝも、儘に信仰上系統の存することである、曇鸞大師自ら亦讚阿彌陀佛偈に其信念を告白讚詠してある、曰く、

十方三世無量壽、同乘一如<sup>ニ</sup>號<sup>ニ</sup>正覺<sup>ニ</sup>、二智圓滿道平等<sup>ニ</sup>、攝化<sup>ニ</sup>隨緣<sup>ニ</sup>故<sup>ニ</sup>若<sup>ニ</sup>干<sup>ニ</sup>、我歸<sup>ニ</sup>阿彌陀<sup>ニ</sup>、淨土<sup>ニ</sup>、即是歸<sup>ニ</sup>命<sup>ニ</sup>、諸佛<sup>ノ</sup>國<sup>ニ</sup>、我以<sup>ニ</sup>一心<sup>ニ</sup>讚<sup>ニ</sup>一佛<sup>ヲ</sup>、願徧<sup>ニ</sup>十方無碍人<sup>ニ</sup>、

今聖人か无碍の一道と宣ふときは選擇本願の念佛である、

十方無碍人、一道<sup>ヲ</sup>出<sup>ス</sup>、生死<sup>ヲ</sup>といふは天に二日なく、地に二王なき如く、十方三世の諸佛も彌陀の選擇本願の念佛より出たたまひて亦此一道を讚嘆するの外はないと斷言せらるゝのである、行卷の次の弘願一乘海の喻の中に猶如<sup>ニ</sup>大地<sup>ニ</sup>、三世十方一切如來出生<sup>ス</sup>、故<sup>ニ</sup>といふも是である、口傳鈔下初にある般舟讚の三世諸佛念彌陀三昧成等正覺も是である、第十七願の十方恒沙の諸佛の讚嘆即ち『阿彌陀經』の六方恒沙諸佛の證誠皆是である、故に之を一道者一無碍道也と申された、此に至りて念佛は無碍の一道なりの大宣言が来る所以である、そこで無碍者謂知<sup>ニ</sup>生死<sup>ニ</sup>即是涅槃<sup>ヲ</sup>、とは正信偈の能發一念喜愛心、不斷煩惱得涅槃、若くは惑染凡夫信心發、證知生死即涅槃の意味である、一念如來の御慈悲を頂きて、念佛すれば知らず識らずの間にもろゝの煩惱とけて涅槃平和の心となる味である、そこで『行卷』の次の文及び和讃に、

言<sup>レ</sup>海者從<sup>ニ</sup>久遠<sup>ニ</sup>已來<sup>ニ</sup>轉<sup>ニ</sup>凡聖<sup>ニ</sup>所修<sup>ニ</sup>、難修難善<sup>ニ</sup>、川水<sup>ニ</sup>成<sup>ニ</sup>本願<sup>ニ</sup>、大悲智慧<sup>ニ</sup>、眞實<sup>ニ</sup>恒沙<sup>ニ</sup>萬德<sup>ニ</sup>、大寶海<sup>ニ</sup>、喻<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>、如<sup>ニ</sup>海也<sup>ニ</sup>、良<sup>ニ</sup>知<sup>ニ</sup>如<sup>ニ</sup>經<sup>ニ</sup>、說<sup>ニ</sup>言<sup>ニ</sup>、煩惱<sup>ニ</sup>氷解<sup>ニ</sup>、成<sup>ニ</sup>功德水<sup>ニ</sup>、

- 盡十萬の無碍光は 無明のやみをてらしつゝ、
- 一念歡喜するひとを かならず滅度にいたらしむ
- 無碍光の利益より 威徳廣大の信を得て
- かならず煩惱のこぼりとけ すなはち菩提のみづとなる
- 罪障功徳の鉢となる こぼりとみづのごとくにて
- こぼりおぼさにみづおほし さはりおぼさに徳おほし
- 名號不思議の海水は 逆謗の屍骸もとまらず

衆惡の萬川歸しぬれば 功德のうしほに一味なり  
盡十方無碍光の 大悲大願の海水に

煩惱の衆流歸しぬれば 智慧のうしほに一味なり  
全體無碍は盡十方無碍光如來の無碍である、常に釋のあるが如く我等には内外の二障がある、外障は草木國土乃至善惡鬼神等の外物である、内障は我等心内の煩惱惡業である、聖人が常に无碍を釋したまふときは我等が煩惱惡業にさへられぬといふ信心の上につきて示したまふのである、此水と水の喩は實に無碍の内心の味を示されてある、即ち惡しき心がとけて絶對彌陀の光明に攝取せらるゝ一念である、管惡のみならず、たとひ聖者の善と雖も此念佛無碍の一道に入りてこそ、初めて絶對の大善大功徳となるのである、「恒沙塵數の如來は、萬行の小善さうひつゝ、名號不思議の信心を、ひとしくひとへにすゝめしむ」海の喩は此意味を示された、清濁の川水、大海に入りて同一鹹味となる如くである、既に功德大寶海に入りたる已上は四大海水もはや本の川水の味はない、何れの一滴も鹹味たらざるはない、一たび選擇本願の念佛に流れ込みたる已上は華嚴も、尊勝陀羅尼も、文殊も、普賢も、皆彌陀念佛の无碍の一道夫れ自身の外はない、抑々行卷に論註無碍の一道の文に連續して一乘海を釋するにつきて華嚴經夫自身を引て無碍の一道を説かれたは華嚴を念佛に結歸するの意にあらず、華嚴經夫自身が念佛無碍の一道を説くに外ならぬといふ祖意である、此の時は聖道淨土門の對立てない、華嚴經夫自身が、つまり盡十方無碍光如來、蓮華藏世界を説きたまひしより外なく、文殊法常爾法王唯一法は即南無阿彌陀

りて曰く、

然<sup>レ</sup>按<sup>ニ</sup>本願一乘海<sup>ヲ</sup>圓融満足極速無碍絶對不二之教也  
と力強く讚嘆したまひ、此念佛を信ずる者は、此絶對の佛力の宿りたまふ人なれば亦機に就て對論して曰く、

然<sup>レ</sup>按<sup>ニ</sup>一乘海<sup>ヲ</sup>機<sup>ヲ</sup>金剛<sup>ノ</sup>信心<sup>ノ</sup>絶對不二之機也

と極力讚嘆したまひてある、今「歎異鈔」本文に單に念佛はと言はずして念佛者は無碍の一道といひ、次の文に直に受け來りて、そのいはれいかんとならば信心の行者にはとのたまひたるのが、即ち此選擇本願を信して、念佛する行者につきて述べたまひたのである、實に嘆異鈔ほど行信の關係につきて圓滿にいたゞける書はない、抑關係などいふ文字を用ゐるからが法門沙汰に陥る源である、從來ても能行所行、能信所信の文字が如何程人の頭を苦しめたかもしれぬ、何んのことはない、如來の本願を信じて念佛を稱ふるのじや、それを法然上人は選擇本願念佛、南無阿彌陀佛、往生之業、念佛爲本と申された、其教を受け、法然上人の爲したまひしことを信じて、其通り親鸞聖人が亦念佛せられたのである、夫が即ち念佛者である、信心の行者である、

そこで其無碍の一道より自然にあらはれ來る力をあらはして天神地祇も敬伏し云云と示された、是上に記したる内外二障に渡りて示されてある、内外固より何を以て區別するか分からぬども、一應區別せば、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障礙するとなしは外界、罪惡も業報も感ずるとあたはず、諸善もよぶとなしは内界といふてもよろしい、併し善惡因果業報はすべて外界に發現する者なれば内界固より外界を離るゝ

佛のことである、同様に涅槃經の一道清淨若くば皆歸一道をも引きたまひ、法華の文は引きたまはねど、聖人の御自釋に法華の無二亦無三、若くは於一佛乘分別説三の意味がある、かくの如く味ひ來れば、一切經を念佛の一念に結歸するのではない、一切經夫自身が念佛夫れ自身を説かれたるに外ならぬ、何んとなれば阿彌陀經にある如く、釋尊夫れ自身が十方諸佛の隨一なれば、釋尊の此世に出てませる所以のもの、念佛を讚嘆するが爲ならずや、爾らば一切經は皆念佛一乘を説きたるものなりと言ふのは當然のことである、此意味を遺憾なく説きたまひしが一乘海の釋である、其釋の起原は論註無碍の一道の文である、そは次の一乘海の釋の書き方で明らかである、曰く、

言一乘海一者一乘者大乘<sup>ヲ</sup>大乘者佛乘<sup>ヲ</sup>得一乘者得<sup>ニ</sup>阿耨多羅三藐三菩提<sup>ヲ</sup>阿耨菩提者、即是涅槃界<sup>ヲ</sup>、涅槃界者即是究竟法身<sup>ヲ</sup>、得<sup>ニ</sup>究竟法身<sup>ヲ</sup>者、則<sup>チ</sup>究竟<sup>ノ</sup>一乘<sup>ヲ</sup>、無<sup>レ</sup>異如來<sup>ノ</sup>、無<sup>レ</sup>異<sup>ニ</sup>法身<sup>ヲ</sup>、如來<sup>ハ</sup>即<sup>チ</sup>法身<sup>ヲ</sup>、究竟<sup>ノ</sup>一乘<sup>者</sup>、即是無邊不斷<sup>ノ</sup>、大乘<sup>ハ</sup>無<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup>二乘<sup>三乘</sup>、入<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>一乘<sup>ニ</sup>、一乘者即第一義乘<sup>ヲ</sup>、唯是誓願一佛乘<sup>ヲ</sup>。

次に「涅槃經」と「華嚴經」を引用し來りて、結びて曰く、  
爾者、斯等覺悟、皆以安養淨刹之大利、佛願難思之至徳也と斷言された、次に上に引ける海の釋が來るのである、そこで行卷の一乘海といふは即無碍の一道と同意である、上來述べ來りたる海の釋にあらはれたる内外の二障、煩惱の衆惡、萬行の少善皆如來の願海に圓融するが無碍の意である、絶對の一佛乘か一道の意である、故に行卷に念佛諸善比較對論が終

ものではない、そこで一ツ注意すべきは無碍の光明無碍の名

號によりて信心を獲得すると夫自身が既に無碍の徳である、上に擧げた和讃に、「盡十方の無碍光は、無明のやみをてらしつゝ、」若くば「無碍光の利益より、威徳廣大の信を得て云云」とあるは何れも無碍の徳によりて一念開發信心獲得する有様を述べられたのである、今は寧ろ其無碍の力が信心の一念に於て行者に宿りて後、行者の身の上にあはるゝ上につきて示されたのである、信後自然にあはるゝ功德につきて無碍の力をあらはされた、即ち信卷にある現生十種の利益、及び現世利益和讃に示されたる功德である、固より一念にあるものゆへに後念にあはるゝものなれば一念後念の區別が必要なのではないが、唯注意すべき點は此等の功德利益は信ありて初て發現すべきもので之を信の目的とすべきものでないと云ふとである、即信といふとが即無碍の一道夫自身に外ならぬゆへに信自身より此等の力を自然にあはらし來るのである、若し此等の利益の爲に念佛するが如きとあらば夫は信でないと言ふとを自白するやうなものである、何となれば人生の利益、現世の功德を豫想する如きは即ち雜修雜善である、「佛號むねと修すれども、現世をいのる行者をば、これも雜修となつてぞ、千中無一とさらはるゝ」寧ろ如來の御力を信じ、名號を信する力夫れ自身が尊きものである、結果の如何を豫想するは信するのではない、其如來の力唯一を信する所が無碍の一道である、そこで聖人が化身卷末に於て諸の修多羅に據て、眞偽を勘決して外教邪偽の異執を教誡せられたのである、實に化土卷といふものは眞實の行信を反而より言ひ顯は

されたものである、教行信證は積極的に眞實を顯はしたるもの、化身土は消極的に眞實を顯はしたるもの、是方便たる所以である、今化身土卷によりて上來述べ來りたる無碍の一道を消極的に顯明してみやう、曰く、

涅槃經言、歸依於佛者終不更歸依其餘天神、  
般舟三昧經言、優婆夷聞是三昧、欲學者乃至自歸命、  
佛歸命法、歸命比丘僧、不得事餘道、不得拜天、  
天、不得祠鬼神、不得視吉良日、乃至不得拜天祠祀、  
神、佛敎の眞髓は南無佛、南無法、南無僧の三歸である、  
而して十方三世一切常住の三寶は即ち南無阿彌陀佛の無碍の一道中に收まるのである、而して此三寶已外念佛已外に何等のものをも禮拜すべきものではない、日月星辰、天神地祇、善神惡鬼、何物にも事ふべきではない、否此等の凡てのものは皆佛法を護持養育するものである、そこで化身土の次の文に大方等、日藏經及び月藏經を引きて、日月年時、大小星宿、四天王、等を安置して諸の衆生を安樂ならしめ、魔女衆魔女、魔王、魔王が念佛三昧三寶歸敬の人を侮ふるあたはざることを、惡鬼神が敬信を得ること、諸天王が佛法を護持養育すること、大梵天帝釋等佛法を護持養育すること等を如何にも丁寧引用したまひてある、遂に護頂經を引きて三十六部は歸三寶の人を護り、地藏十輪經を引きて吉凶禍福を遠離すべしと云ひ、本願藥師經を引きて淨信の善男子善女人は神明、魍魎、厭禱呪咀を遠離すべきことを極言し、菩薩戒經を引きて出家の人、國王、父母、六親、鬼神を禮拜すべからずと斷じ、佛本行集經を引きて三迦葉の事火外道の苦行を戒め、起信論を引きて

の事である、「阿彌陀如來來化して、息災延命のためにとて、金光明の壽量品、ときをきたまへるのみなり」の證文も決して偶然ではない、若し當事聖人死刑に處せられたまひなば恐くは教行信證已下聖人の御教化は殘らなうであらう、淨土眞宗は興行せなうであらう、かく言へば世俗の考て然らば流罪もなさうなものとなふはからひを挾みてはならぬ、化身土卷末に直に然諸寺釋門昏教今不知眞假門戸洛都儒林迷行、今無辨邪正、道路云云とある、是眞假邪正の人生に水際たちてあらはれたる事實である、若し當事法然聖人が捨閉閣抛の文字を揚げて選擇集の製作なくんば流罪はなかつたであらう、されど之を一世に宣言したまひし爲め流罪となりたまひしは、是流罪を以て碍ふるあたはざる無碍の一道たる迄である、拾遺古德傳に法然上人御出立の摸様を描きて曰く、

聖人のたまはく、齡すでに八旬にせまれり、おなじ帝畿にありとも、ながくいきて誰かみん、たゞし因縁つさずはなぞまた今生の再會なからん、驛路はこれ聖者のゆく處なり、唐には一行阿闍梨、和國には役優婆塞、謫所はまた權化の栖砌なり、震旦には白樂天、吾朝には菅原相、上古の英聖猶然なり、況んや末世の愚惑をや、先蹤みにあり、耻とするにたらず、愁とするにあよばず、此時にあたりて邊鄙の群衆を化せんこと莫大の利生なりと、孔子が容れられずして君子を見るといひし如く流罪は少しも碍ふること出來ざるのみならず、無碍の一道の顯現である、而して却て邊鄙の群衆を化することを喜びたまひた、親鸞聖

妄念外道の三昧を戒め、辨正論を引きて道教を戒め、善導、天臺、慈雲、觀法師、神智、大智、源信、論語を引きて鬼神に事ふべからざることを極言せられたるは恰も行卷に、懺興、張倫、慶文、元照、慈雲、大智、戒度、用欽、智覺、元照を引きて讚嘆するを引き、信卷には王日休、用欽、智覺、元照を引きて念佛の行者を讚嘆して、劉雷、抑子厚、白樂天まで淨土に歸せしを嘆し、遂に假とは聖道の諸機、淨土の定散、僞とは六十二見、九十五種の外道是也と斷せられたと同精神である、教行信證は表面より言顯し、化身土は裏面より言ひあらはしたまひたのである、かくの如き絶對無碍の念佛一道である、化身土は其念佛已外の外教邪僞を戒められたのであるか、表面より言へば即ち信卷の眞衆護持の益、至德具足の益、轉惡成善の益等の現生十種の利益及び現世利益讚となるのである、そこで現世利益讚に一々南無阿彌陀佛をとよふればと、徵票して讚嘆せられたのが如何にも此無碍の一道を確信したまひし信念が動きてある、當に信念たるのみならず亦之を聖人自ら之を我身事實に實驗せられたることであらう、即ち皆是れ内心に於ける靈感、外界に於ける奇蹟として聖人が實驗せられたるものである、御傳鈔に於ける箱根權現の供養は天神地祇の崇敬を示し、平太郎の熊野參詣は一向專念の無碍の一道を示されてある、其他聖人の一代は一として此無碍の力の外に出づるものはない。

茲に最も注意すべき法然親鸞兩聖人の念佛のために流刑に處せられたまひし事實である、而して親鸞聖人は此時死罪に處せらるべき所、六角中納言の進言によりて流罪となつたと

人も「本師聖人若し流刑に處せられたまはずば、我亦配所に赴かんや、若し我配所に赴かずんば、何によりてか邊鄙の群衆を化せん、是猶師敎の恩致なり」と、佛天の御はからひを感謝したまひてある、拾遺古德傳の次の文字を讀まば、念佛に對する天神地祇の加護を信じたまふの無碍の信念は實に意外にも聖人に禍せし敵を憐愍したまふてある、曰く、

但し痛むところは源空興する淨土の法門は濁世衆生の決定出離の要道なるがゆへに、守護の天等定て冥瞰をいたさん歎、もし、からは貧道か流罪弟子か斬刑かくのこときの事、前代未聞、こと常篇に絶たり、因果のむなしからざる、いきて世に住せばおもひあはずべきなりと云云

流罪ありて、ますく無碍の一道の力を見るべきである、若し聖人が一向專念を撤したまひなば恐くは流刑の迫害も免れたまひしならん、成覺房、善惠房は一向專修でないと申立て、流刑を免れたとの傳もある、聖人は流罪當日すら一刻も止むへくもない、曰く、

また卒爾をかへりみず、一人の門弟に對して一向專念の義をのべたまふ、御弟子西阿推參していはく、かくのこときの御義しかるべからずおぼえはんへりと、聖人のたまはく、汝經釋をみずやと、西阿申ていはく、經釋はしかりといへども世間の機嫌を存するばかりなりと、聖人またのたまはく、われたとひ死刑におこなはるともさらに變すべからずと云云その氣色もとも熾盛なり、見たてまつる諸人涙をながし、隨喜せずといふことなし。

平素溫潤玉の如き聖人が、此の如き人の肺腑を刺す如き力強

き教化を賜はる、無碍の極である、果して聖人が豫言したまひし、無碍の一道は事實となりて實現した、曰く、

また後に信空上人いはく、先師のことは相違はず、はたしてその報あり、如何となれば、承久の騷亂に東夷上都を靜謐せしとき、君は北海の島のなかにまし／＼て多年こゝろをいたましめ、臣は東土の道の邊にして一時に命を失ふ、先言たがはず、後生よろしくきくべしと云ふはよそ念佛停廢の沙汰あることに凶事きたらずといふことなし、人みな是をしれり。

遂に外界の出来事の上に奇蹟を顯はすに至つた、而して法然上人流罪地讃岐鹽飽島の地頭入道西忍に念佛往生のことを細に授けたまひ、なかにも不輕大士、杖木瓦石をしのびて四衆の縁をむすび給しがごとく、いかなるはかりごとをなしてもすゝめて念佛せしめたまへと宣ふた、如何なる點まで無碍なるか實に計り知られぬことである。

罪惡も業報も感ずるあたはずといふのを、罪惡も業報も感ずるあたはずに作りたのもある、そのときは罪惡は因にして業報は果となる、何れにしても罪障功徳の軀となる無碍の徳、諸邪業繁さはらぬ佛法力の不思議なれば、如何なる罪惡も業報も感ずることはない、諸善も及ぶことなきとは本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なきゆへにと同意にして、他の相對の諸善萬行はとても絶對無碍の念佛に及ばぬ筈である、既に海の釋に於て言ひ盡したる如くである。

眼目となるものは何であるかと云へば、云ふ迄もなくそれは『信』の一字である。今、此の有様をば、今日の時機に合せて、種々の場合を擧げて見やう。

こゝに『信』と云へば、普通の意味で解いても、『まこと』である、『まこと』と云ふ事を萬事に就て心掛ける事を指す。又、『信』と云ふ事は、『ある事を信じて行ふ』意味にも使はれる。何事にしても、一度びこれを信じたならば、飽く迄も貫徹する事である。或は又『人を信ずる』と云ふ時に、飽く迄其の人に對して心の變らぬことをも意味するのである。更に又、『信用』と云ふ事も、多く實業上に表はれるが、矢張『信』の義の一種に外ならぬ。斯くの如く、様々に發現の様式は變つて居るけれども、根本を探れば只の一つである。そこで、先づこの『信』と云ふ事を本として考へた處で、現今の社會に於ける一般の思想に對比し、大にその異なる點を際立て、摘出して見やう。

### 成功の熱中、『信』の浮足

現今、最も能く人の口の上る成功なる言葉にして此の立場から云ふと、頗る危険な言葉である。今日一般の人の耳目の中心となつて居る成功と云ふ言葉——これを善意に解釋すれば、悪いことではないが、普通では甚だ宜しくない。抑も成功とは何を意味するか、結局、社會から著しく持擧されるとか、評判を出すとか、或は高い地位に昇るとか、金錢を得るとか、總て利益的、名譽的、若くは外觀的の意味に於てのみ見られて居るではないか。さればこそ、今日、血氣の青年

## 信仰生活の味ひ

近 角 常 觀

『信』の發現——成功の熱中、『信』の浮足——社會的  
實際——信じて行ふ——信仰の眞意義——信仰  
に入る第一階梯——人生は遊戯でない

自分の話は何時も同種のものであつて、格段變つた事を述べる事が出来ない。併し乍ら、此度は人生の方面から話の端緒を開くとしやう。

### 『信』の發現

世の習俗に従へば、吾人が此の人生に處するに就ても、また單に平生學業を勉強する上に於ても、種々心得風な、規則風な、若くは格言風な云ひ方を試みる風であるが、自分とても、全くこれに賛成せぬではない、必ずしも悪いことではない。けれども、これは兎角律法的、規則的に陥り易いから、根本から見ると、どうも不充分に考へられるのである。

處世の方法と云つても、別に何も嚴然と存立して居るものではない。自分から云へば、矢張信仰を措て外にはないと思ふ。だから、以下の話は、順序として先づ人生に對する信仰の發現を述べ、それから漸次信仰其物に及ぼす考へてある。さて、吾人が信仰を以て人生に處して行くに就て、最大の

が、猛然として世の所謂成功の舞臺に突進する状態は頗る勇しいやうであるが、實を云へば、それが爲めに『信』と云ふ事が浮足になつて居るのは、否み難い現象である。

自分は考へる。人間が世に立つて、眞の成功を得ると云ふのは、何事が根本となるのでもなくして、全く『信』の結果である。處が、不幸にして今日の成功の意義は、此の『信』と正反對の方面を取つて居る。露骨に云ふならば、今日の社會は、生存競争の劇しい、優勝劣敗の世界だから、兎に角奮闘して、他の者に先立つて、機敏に、それからすばしく事を運ばねばいかぬ、と云ふ思想か一般に行渡つて居る。従つて、其の結果は、他を排しても、無理にしても、只進んで取ればよいのであると、人は只管考へて居るらしい。

道理上から云へば、『信』は成功の秘訣だと云ふことは、誰も否定せぬ所だが、翻つて、實際界に立到つて見れば、全く趣きを異にする。即ち、信であるの、正直であるのと、口では云つても、此の複雑な劇しい戦ひの世に在つて、其様な事をして居れば、晩かれ早かれ劣敗者となるより外はない、と云ふ風の感情が、一般の社會に流布して居るのは事實である。

少しく妙な言ひ方ではあるが、世の中に在つて、自分に屬せぬ利益は、如何に焦つて、力めて、これを我物にしやうとしたとて、到底得られぬものである。大學の教へにもある通り、『凡事恃つて入るものは、また恃つて出る』で、本來、『信』なしに自己の身邊につけ得たものは、其物は何時か自己を離れて、もとに歸着するものである。今一層具體的に云へば、



世間一般の人々は、この世の諸々の利益をば、確乎と各個人の所得として、固着して居るもの、如く思ふて居るがこれは甚だしき間違ひである。

人生に於ける『信』の價値は、なすべき事をなして、それから得た結果を得る事なのである。この見解よりすれば、人が信を以て世に處する事は、道德的にせねばならぬ事からてはなく、寧ろ、爾かせざれば嘘なのである。『信』を以てあたるとの損てはなく、『信』を以てあたぬのが損なのである。早い話が、法律を犯して人の所有品を盗むなどは、人生的に云へば非常に敏捷なことをしたと見られるのであるが、併し世人は口を揃へて、愚かなることをしたと呼ぶ。若し、この愚か呼ばりが正しいとすれば、今日の所謂成功も程度こそ違へ、結局は、愚かなることではあるまいか。

吾人が此の人生に處するに當り、苟くも『信』を以て立つことを考へた以上、成功など云ふ事を念頭に置くことは誤りである。先づ、なすべきことをなすが宜い、なすべき事を遺憾なく遂行するならば、成功は期せずして至るのである。なすべき事をなさず單に成功と云ふ點にのみ眼をつけるのは、それ丈反對の『信』と云ふものが浮足になる證據で、危険は此上ない。聖徳太子の憲法に、『信是義本每事有信其善惡成敗要在于信群臣共信何事不成群臣無信萬事悉敗』とあるが、洵に千古の格言である。

故に、一言にして云へば、人が『信』を以て人生に處するならば、如何に歩調は遅くとも、他人から愚かの如く見られることも、成功せずには居られぬのである。これに反して、只々

### 信じて行ふ

又、『吾人が事を信じて行ふ』と云ふ場合にこれをあてはめて見よう。

抑も吾人が人生に處して苟しくも事に就く時に、何が一番必要であるかとすれば、無論、信じて其の事にあたることである。處が、日本では、ある事をなす場合に名譽と云ふ事が兎角目に違入る。それは、利益に對しても熱するけれども、特に日本人は名譽心により多く驅られ易く、その爲めに一身を誤るやうなことがある。一身を誤るのは、その名譽が眞の名譽でなく、根のない虚名の追究に墮するからの事だ。世に在る以上誰にしても、名譽を好まぬものはないが、兎角、それが單なる世間の評判とか、他人から賞められるとか、此様なことに目を付ける人の多いのは慨しい。極端に云へば、今日道徳とか宗教とか正義とか――極めて高尚な理想を口にして居る人が、却つて此の病弊に犯されて居はすまいかと思はれる。

全體、人が名譽を得ると云ふのは、同時代の多くの人が、當人の言論若くは行爲に喝采すると云ふ事である。併し乍ら、自分の考へでは、強ちこの喝采を避ける譯ではないが、吾人が世に處して、ある事業をするに就て、他人がそれを喝采するとせぬとは、固より眼中に置くべきではないと思ふ。自分は飽く迄も信じて事を行ふと云ふ考へさへあるならば、これに對して他人が何と評さうが、一向に關係のないことである。

成功と云ふ事のみを先登にたて、人間の淺い智慧を絞り、短い量見を以てやつたる事は、悉く不成功に終る。これを皮肉に云へば、現代の如く餘りに大きく成功と云ふ事を念頭に置くならば、如何なる事業も決して成就するものではないのである。

### 社會的交際

今日、社交上に他人に盡すと云ふ事をば、多くの人の頭腦に如何に解されて居るか云へば、相手に對して『信』を盡すと云ふことであるらしい。これは正しい見解であると思ふ。併し乍ら、時に依ると、其等の人が斯う云ふ事を口走る事がある。自分がこれ程迄彼に盡して居るのに、彼は手に對して何等の報恩もしない實につまらぬ事だ。』と。これも一應は尤ものやうであるが、能く考へて見ると、これが抑も誤解の源である。

素とく『信』とは他人に與へるものではなくして、我からは非せねばならぬものである。だから、相手の應諾は問ふ所でない。偶々自分が『信』を行ふて、其人がこれに應ぜぬ時に、自分が非常な損害でも蒙つたやうに考へるのは、可笑しいではないか。こゝに至つては、折角無言の間に盡した『信』も、一朝にして消え失せ、結局五分々々のものとなつて了ふ。前にも云つた通り、人が『信』をせぬことは最も愚かなことである。他人が愚かなることをするから、自分も同じ様に愚かをしてよいと云ふものがあらば、誰か笑はぬものがあらう。

これを擴げて云へば、吾人が飽く迄も信じて事をなすからには、假令吾人の思想や行爲が、當時の人に合はず且つ時代にも合はずとするも、初めより顧慮する必要はない筈である。彼の宗教家や先覺者が世に立つに當り、往々にして世間一般の思想で理解が出来ず、迫害と嘲笑との間に葬られて了ふやうなことがあるのは、即ちこゝ等の道理に基くのである。苟くも、正義とか道徳とか云ふことを口にする人は、何時でも時代に一步も二歩も進んだ考へを持つものであるから、俗流に解されぬのは不思議でない。けれども、其人達は、確乎と信じた極致に向つて精進するの外、絶えて他を顧みず、況して世の喝采を博さうなど云ふ考へは毛頭ない故、實に心中はゆつたりとしたものである。

早い話が、人間が眞實信じて、正しいと考へた事にあたるときには、縱し其事柄が世人に了解されずとも、實質に於て、天に名譽の貯金をして置くやうなものである。これに反して、自分がなした丈の事を他人が認めてくれる時には、恰も其の金を直ぐに受取つて懐中するのに變りはない。更に又、自分の事業に、實際の價値以上の名譽を求めると至つては、これは餘程圖々しいもので、自分が社會に對して非常な借金を作るに等しい譯である。昔時の言葉に、上士は寧ろ宛に赴くと云ふことがある。現代に理解せられずして、而も尊い價値あるものこそ、眞に尊むべきものでなからうか。

若し自分が信じてなした丈のことが、直に一般の社會から喝采を以て迎へられるならば、そのことは、とりもなほさず當時の人の理想とし、希望とし、また平生云ひもし語りもし

て居る範圍内の事業を成就したと云ふのみで、何等尊むべき點もない。此等は、世を率ゐたのではなくして、世の風潮に乗じたと云ふに止まるであらう。尙ほ、極言すれば、斯くの如きは、眞に信じて事を行つたとも呼ばれぬかも知れぬ。信じて行ふと云ふことは、虚名に無關係で、且つ多人数の思想にも支配されず、他く迄も一身を捧げて、一向専念にその道に精進することを指すのである。

### 信仰の眞意義

以上挙げ來つた數項は、『信』の發見に關するほんの一例に過ぎないのだが、こゝに一歩を進めて、此『信』の根本ともなるべき信仰に就いて、少しく詳細に絮説しやう。

さて、信仰と云へば、至極簡單で、以上の説話に依つて現はれた如く、人間の總てを捨て、最後に只一つ佛を信ずること——これより外に意味はない。そして、この信仰なるものが、吾人の處生上に及ぼす關係は如何なるものなるか。述べたいのは此點である。

全體、現代に於ける所謂信仰なるものは、主に理想的架空的の信仰が多いやうである。只斯く／＼ありたいと云ふ一つの理想を前に描き、其方へ一歩々々と歩武を進めて行く、と云ふ態度を取る人が多いのである。神なり佛なりを前方に眺めて、吾人は自己の力に依つて、これに近付いて行かうと云ふ信仰だ。これは、固より悪いことではない。併し乍ら、これにて、絶對の神なり佛なりを信じたとは決して云へな

少しも他に心を向ける餘裕がないならば、矢張頗る危険で、子供の抜刀と餘り大した相違がない。此子供に抜刀を捨てしむるには、優しい親が來て、嫣然とした笑ひ、愛の籠つた言葉。それから美味な菓子と與へて、初めて抜刀を忘れさせるのではないか。佛敎の所謂人生を捨てよとは、とりもなほさず一切の事物を捨て、眞なる親の恵みにより、美味な菓子——大光明——を取れと云ふに外ならぬのである。一度此の恵みに入つた時には、右せんか左せんかと云ふ世の中の雜多な道筋を脱越して、こゝに初めて絶對の態度が成立つて來るのである。

吾人が信仰の極、若し此の境地に入れば、自分の身體が亡びやうが、他人が我を措て去らうが、親を失はうが、子を失はうが、友と別れやうが、安じて居る事が出来る。それは、人間だから、喜怒哀樂の情の動かぬことではない。けれども、其の生命はこの情念を超越した處にあるのである。斯くの如く、人生を解脱した人の半面は、既に絶對の光が一身に降りかゝつて居るので、人生到る所、光ならぬはない。人生一として、我に對する佛の恵みならぬはない。人生的に云へば、我を自して敵だと云ふものも、達觀すれば我の信仰を研ぎ、高める恵みの一つである。親鸞聖人の言葉に、盡十方無礙光如來とあるのは、恰も此所の消息を傳へて居るのだと思ふ。彼の理想的、架空的に神や佛を描いて居る丈では、また人生の上に坐つて居ての話だから、甚だしく物足らない。直接にこの光に接しなくてはならぬ。若し此の光に一點氣が附いて、信仰の堂に入るならば、今日捨てた人生の上に、再びそ

い。丁度、人は『信』をせねばならぬから、一歩々々それに向つて力めて居ると云ふ處生法と同じで、『信』にしないのは愚かである。迄は、まだ明かに自覺して居らぬ。

或は又、この神や佛を自分の心に假想して、そして、これを信じて居るやうな信仰もある。斯かる人は、人生を立場——成功とか、名譽とか、信用とか云ふ立場に居り乍ら、其上に假りの神と云ふやうなものを置き、兎に角これに迫つてさへ行けば、間違ひはないと云ふ風である、つまり神や佛を人生に處する上の道具に用ゐるのである。これでは、眞正の信仰は出ぬ。若し夫れ、吾人が一度絶對に神や佛を信じたならば、成功、名譽——此等は始めより眼中にない。又、他人に『信』を盡すにしても、初めよりその返禮を豫想しない。又、事を信じて行ふと云ふ位だから、結果のことなど固より氣にして居らぬ。去り乍ら、此人とても、矢張人間であるには相違ないので、斯様に何も彼も捨て、顧りみぬからとて、食物なしには生きて居られぬし、ある精神の働きのなしにも、これまた生きて居られぬのである。宗敎の中でも佛敎は、此點に於て常に能く誤解される。名譽、財産、進んでは親子の愛情をも斷つと云ふので、畢り、人間の一切萬事を捨て、遁れる事だと解する譯だか、斯くては、眞實『捨てる』と云ふものが解らないのである。捨てるの意味は、萬事から解脱すること、この解脱の境に至るには、一方に必ず一大光明の發現を要求するのである。

子供が抜刀を振廻はすならば、それは頗る危険であらう。吾人が若し名譽を眼中に置き、他人の待遇の如何を絶えず考へ、其の人生が歸つて來るのである。而も、その一事一物に至る迄、條理整然として顯はれて來るのである。

信仰は何も宗敎界にのみ限られた譯ではない。政治にも必要ならば、實業にも矢張必要である。實業の目的は、利益であるけれども、兎に角自分が信じて事をして置けば、死んだ後か、生きて居る内にか、必ず其の信念が形となつて顯はれるに違ひない。

先頃實業界のある人が、今日の青年は勢力に對する報酬を早く望む傾向がある。が、これは宜しくない。宜しく天に預けて置け。預けて待つて居る間には、意外の利が附いて戻つて來る。と云つたのは至言だと思ふ。實業にしても、政治にしても、眞面目な事業をするには、人間の算盤玉や、小さな智慧では到底及ばぬ。信仰の力——實にこれなしには、世の價值ある事業は、何一つ成就せぬのである。何一つ企て得られぬのである。

### 信仰に入る第一階梯

以上、初めは『信』から發現する人の心の一面を話し、それから信仰其物の價值に及んだ。そして、青年諸君がこれを讀む時、一躍してこの信仰の力を掴まぬならば、自分の云つた事は、直に諸君の理想となり假想となつて、其眼に映るであらう。けれども、これは人生上より話す上には、止むを得ぬ譯であるから、兎に角、其理想となり假想となるものより、

自分と人生との交渉を始めるがよい。そして、その實行に力めるのである。と云つても、勿論、それで一生満足せよと解くのではない。一種の理想若くは假想を以て立つのは、ほんの入口で、最後の目的ではない。云はゞ、理想のない人よりは幾分かましだと云ふに止まる。誰にしても、結局には、大なる信仰に入らざれば眞の人生、眞の生命の解決は出来ぬのである。

諸君が世に出て、其理想とし、假想とする所のものを追究して、兎に角眞剣に進むならば、何時かは自分が最初に述べた如き障害——此方は「信」を以て當つて居るのに相手は「信」を以て應じない。これは損である」と云ふやうな——に衝突するであらう。其時である。處理如何に依つて、其信仰の人となり得るのは此時である。

自分の如きも、初めは理想とか假想とか云ふ風のものを目的とし、それに向つて進んで行つたものであるが、後に世に衝突し、圓滿だと思つて居た理想が容易く破壊されるに至つて、終に大なる信仰の下に馳参した次第である。それで、結局、人生は信仰に來らねば嘘で、また人が實際これを得んとするならば、何時でも望むがまゝに得られるのである。前にも云つた如く、初めは理想でもよいから實行して見るがよい。實行したら必ず衝突する。衝突は頓て信仰の道筋だ。併し、信仰の道に進むには、飽く迄も眞面目でなければならぬ。内實力を貯へ、外、控へ目でなければならぬ。斯くて、前途には大なる光明を見、如何なる迫害や艱難があるとも、これは悉く信仰に導く上の試問であると見做すが宜しい。そして、

維新時代の人の成功は、一面命掛けてあつた。それ丈に、彼等には強い所がある。けれども「信」のあるものがない。眞逆の時には、生命をも抛擲せねばならぬと云ふ考へはあるにしても、自分の云ふ信念の力が缺けて居る。故に、兎角人生を馬鹿にしたがる。

『何、世の中は、愚圖々々云つては居るもの、矢張最後は金である。金さへあれば、誰でも服従させる。何事もならぬとはなし。』と云ひ、又『世の中とは馬鹿なものさ。圖々しければ勝つのである。』なども云ふ彼等は現に生死の境を通り抜け、危難の場所を踏んで居るから、世の中の荒浪にあたらず、書物の智識で固められた今の青年とは、慥に數段擡じられた精神を鍛えて居るのは事實であるが、併しまたその一面には、苦んだ丈に彼等は人生を馬鹿にして居る。これ、信仰の力がなかつた證據である。若し、彼等にして、大なる信仰があり、その大なる信仰の下に在つて、維新の大事に接したとするならば、今日に於ても、今一層嚴肅な眞率な清い精神が輝いて居る筈である。賄賂でもやれば直ぐ人は領くと云ふ風の考へは、當然其人の頭に宿らぬ筈である。福澤氏の如き立派な人でも、人生百戯と云ふやうな思想には、全く離れて居なかつた。若し眞に悟りの境に行き、信仰の大光明に接するならば、人生は決して遊戯ではない。眞面目である。意義あるものである。重大な事實である。眞率の心を以て當るべき吾人の道場であるのだ。

一度は信仰を得た以上は、其信仰を以て人生を經營し、すべての人に知らせ、常にこの大なる恵みに向つて、深き感謝の情を持続すべきである。

### 人生は遊戯でない

靜かに人生の内部に觀察眼を向けて見ると、信仰の必要なことが能く解る。痛切に感ぜられる。無信仰の人であれば、其人は左程にも感じて居らぬであらうが、信仰の眼を以て見れば、實に危いものである。實に人生は危い事ばかりである。現代の青年は、殊にこの危険な位置を好んで求めて居る。僅に勞して、多くを求めやうとして居る。これから見ると、維新の成功者は餘程眞面目である。別に吾人は彼等に崇拜眼を向ける必要はないが、兎に角危機を通過して來て居る。彼等は、一度は命を投げ捨てると思悟した事もあらうし、大なる危難を犯した事もある。今日、廟堂に立つて、位人臣を極めて居るやうな人でも、維新の際には、夜も寝ず、家をも忘れ、血と劍との間に奔馳したのが多いのである。或る人は、鮮血の流れる師匠の首を貫ひに行つたものもある。又、實業界に根城を構へ、派出な商戦を試みつゝある人も、維新の混亂には賣つてはならぬ武器を賣つたり、生命を的にして苦勞をして居るのである。此等は、現時の青年が夢にも知らぬ所で、單に彼等の光明の側、成功の側、善い方の側のみを見て、我もまた斯くあるべしと妄想するのは洵に危険千萬なことではあるまいか。



### 十一 往還回向

極樂無爲涅槃界の光景は、凡地にしては證られず、安養に至りて證すべし。我々は到底其境に往かねば知ることも出来ず、勿論説くことも出来ない。假令又佛か之を説くといへとも我等に解し得るものでない。よりて大無量壽經には、自然虛無の身、無極の軀なり

と説き、善導大師は西方寂靜無爲の樂には、畢竟逍遙として有無を離れたり、大悲心に薰して法界に遊ぶ、分身して物を利すること等しくして殊なるなし、或は神通を現して而して説法し、或は相好を現して無餘に入る、變現の莊嚴意に隨つて出づ、群生見るもの罪皆除かる

と讚歎せられた。要するに如何なる言辭を以てしても、形容し能はぬ絶対無限の境である。而して阿彌陀如來も、釋尊も、十方の諸佛も、聖德太子法然上人の如き此土の化身まで、皆廣大の境よりあらはれたのである。それであるから此靈境を強いて云ひあらはさんとせば、衆生濟度のことを云ふより外に道は無い。今まで深き眠に入りてあつたものが、忽然と目醒め來つては何とも云へぬさへ、した心地である。而して自ら目醒めたるものは眠れるもの、恐ろしき夢の爲に苦しめ

るものをゆすり起し呼び醒すより外に仕事が無い。今亦然り、佛陀の境界を覺と名く。無明長夜の深き眠に沈むを不覺と名け、之より覺醒したるところを始覺と名く。いよく無明の夢より醒めて見れば、そこは昔から目醒めたる境界であるから、之を本覺と名ける。彌陀如來はその本覺の境より出て來つて、十劫正覺を唱へて廣大の惠を十方に垂れ玉ひ、我等を導いて其本覺の境に引入れて下さる。我等もその廣大の佛境に到り了れば、還て大悲を起して、此人生の上に歸つて來て衆生濟度の大事業を爲す。これが還相回向である。さればこの還相の道筋は、目醒めたるものが眠れる人を起すのでつまり眞實證に引附いてある自然の結果である。是に就て天親菩薩の淨土論には五功德門といふが示してある。五門とは一には近門、二には大會衆門、三には宅門、四には屋門、五には園林遊戯地門これである。其近門とは佛の惠の聞へたとき、恰も監獄にある不孝もの心に親心が徹到したとき、これまた親の家庭に遠ざかつてあつたものが、親の方へ近づく如く、絶對の佛陀と意志が疏通して見れば、心か佛の御許に往つてあるところである。次に大會衆門とは、これは人生に於て佛の惠を喜ぶものは、凡聖をいはず智慧善惡を論せず佛陀を中心としたる如來の眷屬である。よりに曇鸞大師は「同一に念佛して別の道無き故に、遠く四海の内に通じて皆兄弟なり」と喜ばれた。第三に宅門とはいよゝゝ人生の壽命を畢へて、この色身の滅ひたる時極樂界に往生することは、例へば監獄の門を出て、親の邸宅内に歸り來つたところである。善導大師の般舟讚に

ある。一寸考へると、あるときは法藏菩薩にして見たり、或るときは我々が極樂に往生したる上の事にして見たり、大に矛盾したるが如くであるか、これには有り難い味がある。それはどうかといふに、法藏菩薩が一如法界より出て來つて願行の薰修によりて阿彌陀佛となり玉ひた。我等はまたこの菩薩の廣大願力によりて、一如法界の極樂に往生して、而る後その一如法界から再びこの人生にあらはるゝので、何れにしても入出往還の道筋はかはらぬのである。然らばさういふ廣大のはたらきを以て顯はれて下さる有様は如何といふに、此事は今こゝに於て充分にいふことは出來ぬが、證卷には智慧門、慈悲門、方便門といふ三種の門を開いてある。尤も源これは曇鸞大師の往生論註の文である。論註には

一には智慧門によりて自樂を求めず、我心自身に貪著するを遠離せるが故にとの玉へり、進を知り退を守るを智といふ、空無我を知るを慧といふ、智によるか故に自樂を求めず、慧によるが故に我心、自身に貪著するを遠離せり、  
二には慈悲門によりて一切衆生の苦を抜いて、無安衆生心を遠離せるが故にとの玉へり、苦を抜くを慈といふ、樂を與ふるを悲といふ、慈によるが故に一切衆生の苦を抜き、悲によるが故に無安衆生心を遠離せり、  
三には方便門によりて一切衆生を憐愍し玉ふ、心、自身を供養し恭敬する心を遠離せるが故にとの玉へり、正直を方と云ひ、外已を便といふ、正直によるが故に一切衆生を憐愍する心を生ず、外已によるが故に自身を

彌陀諸佛に告げて曰く、極樂彼の三界と何如ん親往化生俱に報ひんと欲す、合掌悲咽言ふ能はずと云はれた、洵に有り難いことである。第四に屋門とは極樂に在りて絶對無限の法味樂を受けるところで、例へば奥座敷に入りて一家團樂して種々の珍味を喫して、且つ語り且つ喜ぶところである。般舟讚には

父子相迎へて大會に入る、即ち六道苦辛の事を問ふ、或は所得人天報あり、飢俄困苦體に瘡を生ず、爾の時彌陀及び大衆、子の苦を説くを聞て皆傷歎す彌陀諸佛に告げて曰く、自作自受他を怨むる勿れ

とある。此の如く親の家庭に於て充分の慶樂を受けたる上は自ら後庭に出て、林間に逍遙するが如く、一たび無上涅槃を證得しての後は、還て煩惱生死の園林に出て來るが自然の結果である。これが第五の園林遊戯地門である。この有り様を論註には、彼の法華經普門品に見へたる觀音の三十三身の示現の如くといふてある。これが即ち還相である。この還相に就て廣く考へれば、法藏菩薩の一如海より來現したる有様も、釋迦如來が悉達多太子として人生上に顯はれて佛敎を興隆したるも、乃至聖德太子も法然上人も皆この筋道より出て來られたのである。

抑此證卷に於て極樂淨土の様子は極めて簡潔に書き去つて、多分は還相の方面に力を入れてある。然る所以は眞實證の内容よりいふならば、必ずこの還相を云はねば云ひやうがないからである。而してこの還相の菩薩の種々の事柄が、親鸞聖人の入出二門偈に來ると、全く法藏菩薩の事になりて

供養し恭敬する心を遠離せり、

といふてある。佛陀の境界は智慧慈悲の二つある、此二つを以て我等に臨むが方便である。親鸞聖人を以て見れば、聖德太子は觀音慈悲の化身である、法然上人は大勢至智慧の化身である、而して煩惱生死の園林間に明らかに、此の如くの方便力を顯はして御導き下されたと信じて居られたのである。此の如く深く信じて疑ふ能はざる親鸞聖人が、此信仰眼より論註の文を取り來つて、還相回向の妙用を讚歎せられたのが證卷である。乃て今この論註の文を以て彼の聖德太子の理想的經文とも云ふべき勝鬘經に照らすに、其思想が兩々相等しきものがある。太子の講せられた法華、維摩、勝鬘の三經の中、勝鬘經には十大受三大願といふことが説いてある。其十大受の中に

世尊、我れ今日より乃至菩提に至るまで、若孤獨、幽弊疾病、種々の厄難困苦の衆生を見れば、終に暫くも捨てず必ず安穩ならしめんことを欲ひ、義を以て饒益し、衆苦を脱せしめて然る後に乃ち捨てん、といふがある。彼の四天王寺に敬田、施藥、療病、悲田の四院を設けたるを初めとして、太子一代の間の社會救濟の事業は皆この悲願より來つたのである。又

世尊、我れ今日より乃至菩提に至るまで、若し捕と養との諸の惡律義及び諸の犯戒を見れば、應に折伏すべきものは而も之を折伏し、應に攝受すべきものは而も之を攝受せん、何を以ての故に折伏攝受を以ての故に法をして久住せしめん(已下省略)

といふがある。彼の守屋討伐は其折伏であつて、横暴無道の蘇我馬子を感化したるは、正しく其攝受である。而して我れ力を得んときとあるは、政治的威力、財力、道徳的感化力等であつて、太子は是等の力を得玉ひし後は、悉く之を衆生濟度に用ゐ玉ひた。又

世尊我れ今日より乃至菩提に至るまで、自ら己の爲に四攝法を行せず、一切衆生の爲の故に無愛染心、無厭足心、無望礙心、を以て衆生を攝受せん

といふがある。布施、愛語、利行、同事の四攝法皆悉く衆生の爲にし玉ふ。太子が膳妃と共に作り玉へる家庭は、亦必や同事攝にして、愛見の慈悲にあらず、全く無染清淨の居士の莊嚴なることを信せざるを得ぬのである。其他此十大受を以て太子一代の事業行蹟を照せば、太子の一生は全く勝鬘經の思想の實現である。勝鬘夫人跡を七地に垂れて、八地以上の攝受正法、大乘波羅蜜の妙境を欲願し玉ふ求道心と、及び彼の經の無愛染心、無厭足心、無望礙心の文字とは、論註に所謂未證淨心の菩薩、八地已上の淨心の菩薩と畢竟して寂滅平等法身を得ると云ふこと、及び無染清淨心、安清淨心、樂清淨心を有し玉へる淨土還相の菩薩を説くと、ころと彼此相通するものといふも不可なしてあらう。如之太子自ら佛子勝鬘と稱し玉へり、考へ來れば皆是れ還相大士の所作であるといふこと疑を容るべきところでない。

今年京都博覽會に於て、百濟國阿佐太子の筆と傳ふる聖德太子の像を接見しました。この像は御物である。其阿佐太子が、聖德太子を禮して「敬禮救世大慈觀音菩薩、妙教流通東方

日本國、四十九歲傳道演說」と云ひ、日羅はまた「敬禮救世觀音傳燈東方粟散王」と云ふたといふことである。聖德太子はまた自ら廟を河内國磯長に營み玉ひ、其窟内に自ら二十句の偈文を記して置かれた。其文に曰く

大慈大悲本誓願、愍念衆生如一子、是故方便從西方  
誕生片州興正法、我身救世觀世音、定慧契女大勢至  
生育我身大悲母、西方教主彌陀尊、眞實眞如本一體  
一體現三同一身、片域化緣今已盡、還歸西方我淨土  
爲度末世諸衆生、父母所生血肉身、遺留勝地此廟窟  
三骨一廟三尊位、過去七佛法輪處、大乘相應功德地  
一度參詣離惡趣、決定往生極樂界

これは随分著しいことを書いたものである。私は本年越中井波瑞泉寺に於て、巨勢金岡の書いた聖德太子の繪傳を拜した、其繪傳四幅の上額に此二十句の偈文を書いてある。この額は宇多天皇の御宸翰と申し傳ふるところである。兎に角斯の如く古文書の上に「我身は救世觀世音」等と云ふてある、いよ／＼還相の大士なること疑なきことである。親鸞聖人は絶對不可思議の信仰に入ることを得たは、全く此等還相の大士、園林遊戯の導きである深く喜ひ玉ひた。而してこの他力信仰の顯れとしての聖人の一生の生活は、或は愚禿と自稱して身を在家俗人にひとしくし玉ひ、玉日の君と共に家庭を造り玉ひたるも、皆此人生の上に佛陀の恵を喜はれたる聖德太子の御思召に従はせられたのである。聖人後の時に常陸の稻田に於て、「救世菩薩の告命をうけし古への夢今に符合せり」と云はれたはこの所以である。更に著しく云ふならば、佛敎の生

粹は日本佛敎史上先づ聖德太子の上にあはれてあるが、それが猶一層著しく人生的にあはれたが、親鸞聖人の宗敎である。世間の俗生活の上に佛陀の恵を喜ぶといふ日本の宗敎は、こゝに成立したのである。是の如く聖人の胸中には、自身信仰に入つて永遠の幸福を得たること、還相大士の廣大不可思議の方便力が、兩々相並んで深き味のあるところから常に往相還相二種回向と喜ばれ、殊に又聖德太子和讃に於て幾回も二種回向の名の出であるのは、寔に偶然でないと思はれる。

前來述べ來つたる、往相還相は何れも自分からするにあらず、全く佛陀から來るところの御惠即回向である。敎行信證往相還相一として佛陀の回向ならざるはあらず、證卷の尾に於て聖人は非常に渴仰歡喜して、

爾かれば大聖の眞言、誠に知ぬ大涅槃を證することは願力の回向によりてなり、還相の利益は利他の正意をあらはずにあり、是を以て論主は廣大無碍の一心を宣布して、普偏く難染堪忍の群萌を開化す、宗師は大慈往還の回向を顯示して、慇懃に他利利他の深義を弘宣し玉へり、仰て奉持すべし、特に頂戴すべし、

と、無上の嘆美をせられた。前にも云ひたる如く、他利々他と云ふたのは佛力願力を顯すと云ふ所の非常に大切なる釋義である。此他利の釋義は、其源往生論註にありては、五功德門中第五の遊林遊戯地門から來て居る。其園林遊戯地門の利他の事業、丸きり本源を尋ねて見れば、法藏菩薩の本願力回向である。園林園化も佛陀が爲さしめ、聖德太子法然聖人も皆

佛陀本願海より出て來つたのである。よりにて聖人は「誤つて脇士に事ふること勿れ、直に本佛を仰ぐべし」と仰せられた。殊に淨土文類聚鈔に於て

若しくは行、若しくは信、若しくは因、若しくは果、若しくは往、若しくは還、一事として如來清淨願心の回向成就したまふところにあらざるはなし、應に知るべしと云ふてある。行信因果往還皆願力より利他せらるる回向であるといふが眞宗の骨目である。

根拠つたなしとて卑下すへからず、佛に下根をすくふ大悲あり、行業をそそかなりとてうたかふべからず、經に乃至一念の文あり、佛語に虚妄なし、本願にあやまりあらんや、名號を正定業となつくることは、佛の不思議力をたもては往生の業まさしくさだまらゆへなり、もし彌陀の名願力を稱念すとも、往生なを不定ならば、正定業となつてからず、我すてに本願の名號を稱念す、往生の業すてに成辦することよるこふへし、かるかゆへに臨終に再び名號をとくへすと往生をとくへきこと勿論なり一切衆生のありさま過去の業因まち／＼なり、また死の縁先量なり、やまひにかかれて死するものもあり、つるきにあたりて死するものもあり、水にをはれて死するものもあり、火に焼けて死するものもあり、乃至殺死するものもあり、酒狂して死するたぐひあり、これみな先世の業因なり、さらにかるへきにあらざり、かくのこときの死期にいたりて一旦の妄心をおこさんほかは、いかか凡夫のならひ名號稱念の正念もおこり、往生淨土の願心もあらんや、平生のとき期するところの約束もしたかは往生のそみむなしかるべし、しかれば平生の一念によりて往生の得否はさたまるものなり

嘆 咏

涅槃

甲 之

こしかたゆくすゑ  
めぐらす思のみだるを  
すぶるとつとむる  
さながら吾はあつ  
底無き淵に。  
うつし世すつるに  
まつたさいのち  
こゝにさはみなし。

ああ、業科、罪無き、そは自らのあたひの無上なるを知らず！  
ああ、従順、謙遜、愛にみつるをしまさる、性質の稀有なるた  
まものー  
(ゲーテ)

静 け

甲 之

山のいだゞき  
片枯る、木末、  
吹く風音無し  
常磐木の森。  
荒木の小家  
ともしき窓。  
戸にゆく小みち  
くさむらの中に。  
湧さくる思を  
自然の胸に  
うまいせしいにしへ人。

(イルメナワの山中ゲイ  
テの小家の寫眞を見て)

深夜筆と呵して

増 田 八 風

一日の疲れも知らにこよひはも何にはずめる心にか  
あらむ  
遠方の火事の火見けりそれ故か心はずみてあさへか  
ねつも  
ねむらえぬまゝに再びひともせばいづくにか鶏の鳴  
く聲きこゆ  
大海の岸によする波かへる波高なみ立つか我が胸に  
して  
はずめる心のまゝを筆とりてうつしてみなば静まら  
むかも  
地下にして力養ふ筈が突き出て出づべき時は來にけ  
り  
日 筈の力は絶えず地下にして養はれたり三百六十五  
も 筈は堅き地割りて出てぬべし桑の若芽を霜いたむと  
も 蚯蚓はむ朽葉の下におさへられて亦朽ち果てむ筈に  
非ず

筈は伸びずばやまじ天つ日の光吸ふべき葉を出すま  
て

筈は一本にあらず同じ根ゆ揃ひ出づべし六もと七も  
と

竹むらに藪蚊しわかばそを透ふと風立て送れ科戸の  
大神

しかはあれ一つ二つは残し置きて狸來らは腹刺さし  
めよ

地震は竹むらに行け竹の根が堅むる土の裂くるあ  
らめやも

筈の其の根は遠く山河を越えてかなたの鏡につゞけ  
り

高峯には雪なほ残る麓野の空に啼る朝雲雀か  
も

高く低く右に左にまへうしろ思ふがまゝに空なきわ  
たる

地にありて花に巢を組む雲雀はも空に昇れば春の歌  
うたふ

地にあれば子を思ふ親空にあれば春をたゞふる歌人  
雲雀

一羽空にあれば一羽は地にあれど一つ心よ雌雄二羽  
雲雀

(三月廿四日夜)

春季傳道日割(石見、九州方面)

吾人は從來年中數回の時機を選びて、地方在住の諸君と共に佛陀大悲の發揚に努めたりしが、近時我國時運の急進は、全國民をして内心の危急を感ぜしむること日に彌々激しきが如く、今や殆んど全土に互りて、求道の機運瀰漫せる概あり、殊に從來宗教に冷淡なりし諸地方に於て、頻々として切實熱烈なる求道者の續出するを見るは、實に吾人の慶喜感謝に堪えざる所、あゝ大悲善巧の攝化、眞に不可思議なる哉。而して今春も亦々之等同胞の熱心に催うされ、暫く櫻花爛熳の都門を避けて、地方僻遠の同朋に道を傳ふべく、本誌の近角は既に本月二十五日を以て求道學舎一同に送られ、新橋驛を發程して先づ石州に向ひたり。想ふに本日あたり初めて石州の同朋に會し、第一回の講演を開きたるものならん。吾人は幸に大威神力により、此長期傳道中慈光に感泣し給はん人の一人にても多からん事を切願して止まざるものなり。今傳道豫定日割を擧ぐれば次の如し。

- 三月二十五日 東京出發
- 同 二十六日 三田尻着
- 同 二十七日 道中
- 同 二十八日夜 石見横田正法寺
- 同 二十九日ヨリ四日間 同 益田町泉光寺

- 四月二日 同 土田西樂寺
- 同 三日 同 三隅町
- 同 四日五日 同 濱田町
- 同 六日 海路福岡ニ向フ
- 同 七日八日 福岡醫科大學青年會
- 同 八日夜 釋尊降誕會
- 同 九日 熊本ニ着
- 同 十日 道中
- 同 十一日 大分縣竹田着開演
- 同 十二日 同 王東町
- 同 十三日 同 岡本村藤村氏方
- 同 十四十五日 道中
- 同 十六日 大分縣別府西法寺
- 同 十七日 同 大分町
- 同 十八日 同 日出町
- 同 十九日 同 高田町
- 同 二十日 豐前封戸村
- 同 二十一日 同 四日市町兩別院
- 同 二十二日 同 中津町
- 同 二十三日 同 耶馬溪
- 同 二十四日 同 松江
- 同 二十五日 同 添田
- 同 二十六日 同 行橋
- 同 同 小倉
- 福岡縣大隈町有田方

求道講話

- 同 二十七日 道中
- 同 二十八日ヨリ五日間 長崎市
- 五月三日四日 道中
- 同 五日 近江長濱町
- 同 六日七日 同 郷里歸省
- 同 八日 歸京ノ途ニ上ル

前月に引き続き本月も亦非常に來聽者多く、求道學舎日曜講話は毎回常に満室の盛況にて、吾人は彌々信仰の機縁至れるを感ぜざる能はず、殊に最終日曜信仰談話會には例によつて出席者夥しく先づ初めに本所の笠木輔一翁の告白あり、翁が古稀の齡を以て、信仰に道に迷ひ、懊惱多年、而も終に求めて止まざりし凜然たる勇氣と、今や信仰に入りて胸中押ゆ可らざる歡喜の面貌とは、實に列席の青年男女をして殆んど感歎に堪えざらしむるものありき。次に告白せられたるは高等師範學生林英三君にて、君は幼時より今日に至る迄の殆んど一日の休みなき宗教的煩悶、及び今回彌々煩悶の極に達して翻然大悲の矜哀に氣附きたる有様をば、殆んど一時間に渡りて最も詳細に告白せられ、一同唯々大悲願力の不可思議なるを驚歎するの外無かりき。氏の告白文は次號の本誌に掲載の約なれば讀者諸君は就きて一讀せられん事を望む。猶ほ目下信仰の氣運斯の如く勃興せる時に際し、近角地方傳道の爲め講話を休合せざる可らざるは吾人の最も遺憾に堪えざる所都下求道者諸君の諒察を乞ふ所なり。

求道會館設立喜捨金 受領報告(第三十四回)

- 一金拾圓也 長崎 赤瀨 保次殿
- 一金壹圓也 熊本 中尾みつ子殿
- 一金壹圓也 東京 本谷 暢音殿
- 一金壹圓五拾錢也 越中 經國 祐慶殿
- 一金參圓也 尾張 佐藤 淺次郎殿
- 一金壹圓也 尾張 山田 仙太郎殿
- 一金壹圓也 廣島 中井 眞一殿
- 一金拾圓也 東京 廣野 了寬殿
- 一金貳拾圓也 長門 町原 虎之介殿
- 一金五圓也 本所 笠木 輔一殿
- 一金五圓也 芝 福田 はま子殿
- 一金貳圓也 長門 中柴 宇一殿
- 一金壹圓四拾四錢也 伊勢 小 林 眞純殿
- 一金五拾圓也 高輪 小 林 八郎殿

右御寄附を忝うし難有奉存候  
茲に謹みて奉感謝候也  
通計貳千八百拾四圓九拾四錢也  
小計 百拾壹圓九拾四錢也  
故秀知殿追悼紀念トシテ





每月一回 一日發行  
三號發行

# アカネ

第一卷  
第二號  
價一冊十五錢 郵稅一錢  
六冊稅共九十錢

西比利亞小説ふたつのまことと(マツチエト作)

紀行文松虫草 狹野茨園 長塚節

漱石氏の「鶏頭序」を評す 甲 八

空想文學の實例 甲 八

子規派の短歌を論ず 甲 八

消息 諸同人

課題短歌長詩 大須賀乙字

月並論 鹽山

新らしき戀新しき生活(グレート作) 乙 龍

歌壇漫言 甲 八

俳壇漫言 乙 龍

清水雉子(長詩) 甲 八

不斷力、汝はいかに(長詩) 甲 八

遅日(短歌) 甲 八

英國新進作家モルガンの小説 廣瀬青波

卷頭西比利亞小説は十五頁の短篇にしてしかも複雑なる事件の發展と深刻なる人生の疑惑煩悶を緊密に描寫す、日本現時文壇の冗漫にして統一無き即興的作物に慄らざる諸士の一讀を切望す、英國新進小説家ウヰリアム・ド・モルガン氏の評論は氏を有名ならしめし二篇の梗概を述べ英國小説壇の歴史と最近歐州文學の趨勢とを顧みて着實綿密なる評論をなす、日本現代小説壇と参照せば所益尠なからざるべし。乙字氏の月並論は向上求道心の必要をとき進歩發達が生命ある詩歌の徵候なるを論ず、現時俳壇評論界に於ては他の摸倣を許さず、其他漱石氏の文藝評論品子女史の和歌青々氏の俳句歌壇の現状小説界の前途等に關する評論と長詩短歌の製作とは誌上に滿載さる。今回新たに俳句を募集す、締切は四月十二日、發行所宛、數無制限

短歌 戀 左千夫選  
落花 龍選  
雉子 乙字選  
爐塞 碧童選

東京本郷區駒込子力ア込駒區郷本京東  
大賣所 堂京東 上田屋 盛春堂 服部書店 雲影閣

近角常觀著(品切中)

## 信仰之餘瀝

定價拾五錢  
郵稅貳錢

近角常觀著(再版準備中)

## 人生と信仰

定價貳拾錢  
郵稅貳錢

近角常觀校訂(再版)

## 冠頭歎異鈔

一冊郵稅共七錢  
(定價五錢郵稅二錢)  
但三冊までは郵稅貳錢

發行所

東京市本郷區  
森川町一番地

求道發行所

近角常觀著(第四版)

## 懺悔錄

定價貳拾錢  
郵稅貳錢

發行所

東京市本郷區春木町  
二丁目二十一番地  
東京市本郷區  
森川町一番地

森江分店  
求道發行所

賣捌所

東京市本郷區  
森川町一番地

大賣捌所

### 規定

- 一、本誌は毎月一回一日發行とす
- 一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事
- 一、但郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべし、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
- 一、回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべし
- 一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵稅一冊
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	に付五厘

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢  
一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事  
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし

明治四十一年三月廿九日印刷  
明治四十一年四月一日發行

發行兼編輯人 近角常觀  
印刷人 白土幸力

東京市本郷區森川町一番地  
東京市神田區表神保町

發行所 求道發行所  
大賣捌所 東京堂

前號要目

◎絶對純一の信仰  
求道  
《一乘海と大信海》

◎自然の淨土◎太子讚靈威  
講話  
感謝

◎善巧攝化  
聖傳  
近角常觀

◎チャータカ釋尊傳  
第六 眞の聖なる者

◎獲信の動機  
告白  
原直次郎

◎歎異鈔―第六章  
講義  
慶歎  
近角常觀

◎眞宗慶嘆  
十 無爲涅槃  
近角常觀

◎信濃歌〔長詩〕  
歎咏  
左千夫

◎母〔頌歌〕  
時報  
八風

◎羽村求道會◎安中涅槃會◎二月中の求道會

求道第五卷第四號 明治四十年十一月十二日第三種郵便物認可 明治四十一年四月一日發行 (毎月一回一日發行)

東京市田原町二丁目三番地